

## 当館所蔵の「絵入り本」解題④

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四七号に掲載した拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題③」に続くものである。

本稿も前回同様、『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査し、目録題の順序に拠って解題を掲載する。

なお、「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵を伴うものすべてを対象とした。

【一一九】和歌集一首撰 嘉永六年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇一・〇四二六」

本書は和歌を学ぶ童女向けに編集された歌書のひとつで、『古今和歌集』から記名歌人の歌を一三〇首抄出して掲載したもの。毎半葉に一首ずつ、歌人の肖像と和歌が載る。歌人に対する注釈が枠外に載る。全一冊。

序文によれば、作者は大森盛頭。さる高家の八歳になる子女のために、本書を記したという。伝未詳。序者はこの大森盛頭から許しを得て本書を

版木に起こし、出版するに至ったと述べているが、序者である在原正高に關しても詳細は不明である。

ただし、在原正高の序文は、近世期の子女教育の様子を記録した貴重な資料であるといえる。その記述によれば、当時の子供たちは八歳くらいから和歌を学び始め、その際、最初に習得するのが「百人一首」であったという。『古今和歌集』はその次の段階にステップアップした教材であり、そのために作られた参考書が本書にあたる。

挿絵の構図は伝統的な歌仙絵に倣ったもの。画面上部に和歌が描かれ、下部に肖像が描かれる。衣通姫など伝説的な人物の肖像も多い。絵師は佐藤玄賢。伝未詳。風俗の考証としては誤りも少なくないが、出版当時の『古今和歌集』歌人のイメージ受容があらわれた内容となっている。

第一丁から第三丁までに序文の記載。毎半葉九行。第四丁に歌人の目録が載る。以降六九ウまで和歌と歌人の絵。丁付はのどの部分にあり、版心に記載はない。磨滅が少なく刷りの状態は良い。

なお本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に「番外書冊」の墨印がある。

【書誌】

外題・「古今和歌集一首撰」中央黄色料紙刷題簽（一七・五糎×三・七糎）  
内題・「古今和歌集一首撰」

表紙・改装縹色菊唐草空押表紙（二六・〇糎×一八・〇糎）

墨付丁数・七〇丁

挿絵枚数・六五丁一三〇図

匡郭・四周単辺（一九・六糎×一四・五糎）

印記・「日本政府図書」「番外書冊」

【刊年・刊行者】

七〇才の刊記は以下の通り。

「嘉永六年癸丑年正月／下谷御数寄屋町／岡村屋庄助」

本書は嘉永六年の出版。版元の岡村屋庄助は江戸の版元で、のち池之端仲町に移っている。幕末を中心に活動し、森島中良の『紅毛雑話』などを出版した。左助と誤記されている場合がある。

また江戸の書肆による相合版も存在する。

【一二〇】〔自讃歌註〕 刊年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇一・〇三〇七」

本書は宗祇の編と伝えられる絵入りの和歌注釈書である。対象としているのは、鎌倉時代に成立した秀歌撰『自讃歌』。文明一六年に宗祇がこれに注釈を加えた。それに絵を加えて出版したのが本書に当たる。別名『絵入和歌集』。三卷一冊。

秀歌撰『自讃歌』は、鎌倉時代中期に成立したと考えられている秀歌撰で、特に『新古今和歌集』から多く採る。撰者は不明だが、かつては、後鳥羽院の命を受けて歌人たちが自選したものと考えられており、そのため人気は高く、和歌の入門書として広く享受されていた。宗祇の『自讃歌註』も、そのような需要に応じて製作されたものである。特に宗祇が記した『自讃歌註』は、東国の武士を対象とした注釈書であった。和歌の大意や語釈

に関しては平易でわかりやすく解説し、本歌取りの指摘を多く載せるのが特徴である。また、先行する注釈書や正徹等による注釈書に対しても肯定的な姿勢をみせる。初心者のための基礎知識をまとめることに主眼を置いていると考えられる。

こうした宗祇の『自讃歌註』は、近世に入り、寛永一〇年にまず古活字版が刊行され、寛永一三年、慶安元年、寛文八年と続いて製版として刊行されて流布した。そのうちに、菱川師宣が挿絵を担当し、絵を添えて出版されたのが本書である。『自讃歌註』はその別名を『宗祇撰歌註』『和歌注撰抄』『和歌微旨』等と称されたが、絵入り版である本書に関しては特に『絵入和歌集』と呼ぶ。島根大学桑原文庫にも同名の本が所蔵されているが、内容は概ね同じだが、添えられた挿絵が大きく異なっており、本書とは別版で、『絵入和歌集』とされる版についても数種の版が認められる。

本書においては、序文を除く本文部分は上下に分割されており、上段に本文、下段に絵が入る。上段は毎半葉約一九行でやや過密な版面。毎半葉に二首から三首が載せられる。下段の挿絵はそのうち一首に基づいた絵が添えられる。歌仙絵の伝統的な構図を踏襲した肖像画の場合もあるが、風景と歌人を併せたもの、またあるいは、和歌に詠まれた風景のみを描いたものもある。絵師は菱川師宣。四三ウの本文末尾、刊記の横に「絵師菱河師宣」と載るが、入木による後補であろう。

本書の場合は内題を欠くが、扉部分に墨書で「自讃歌註」とある。また、三卷三冊で出版されたものを合冊して一冊にしてある。

なお、本書は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「自讃歌註」中央四周双边刷題簽に墨書（二六・八糎×三・〇糎）  
内題・扉に墨書「自讃歌註」

表紙・改装紺色表紙（二六・〇糎×一八・八糎）

墨付丁数・四三丁

挿絵枚数・七七図

匡郭・序文（四周单边 二二・〇糎×一六・三糎）、本文（上段・四周单

辺 一一・〇糎×一六・三糎）（下段・四周双边 一一・三糎×一六・〇糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・一九丁丁付墨格。和歌の冒頭に朱入り。四三ウ本文末尾に宗祇の元奥書。

#### 【刊年・刊行者】

四三ウ本文末尾に刊記あり。ただし刊年の記載なし。

「仲春 絵師菱河師宣／松会開之」

刊年は求版の際に削除されたと思われる。また、「絵師菱河師宣」とある部分は、入木による後補であると考えられる。

刊記によれば本書はいわゆる松会板であり、江戸板。ただし松会一統の中でどの書肆の扱いであったかは不明である。松会市郎兵衛、松会三四郎等は、幕府御用を務めており、江戸で最大級の書肆であった。

【一二一】和歌さゝれ石 元禄一六年刊 二冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇一・〇〇六〇」

本書は一般的には『新歌さざれ石』という書名で知られている類題和歌集である。元来二〇巻六冊であったものを、本書は合冊して二〇巻二冊。題目ごとに近世の歌人の秀歌を配列。約一〇五〇首の和歌を載せた。撰録された作者は、戸田茂睡・内藤風虎・山名玉山・清水宗川・沢庵禅師等、

大名・旗本・僧が中心。特に戸田茂睡は、編者の師にあたる。

編者は釈了寿。本書の他に著作は知られておらず、詳細はあまり伝えられていない人物だが、戸田茂睡の弟子の中でもかなり近い人物であったようで、了寿の名を記した茂睡の書簡が残されている（大東急記念文庫所蔵）。詠歌は茂睡編『梨本隠家勸進百首』『鳥の跡』などに収録されている。

戸田茂睡は名門の武家に生まれながら、その官途があまり恵まれていなかったこともあり、出家して浅草および本郷で風雅の生活を送った人物である。歌人としてまとまった歌集が残されていないため、本書などの撰集でその作風を知ることができる。歌風の完成度はあまり高くないとの評価が一般的だが、伝統歌学に積極的な批判を加えた人物であり、編者もその教えを受けたと思われる。

編者自身の手による序文によれば、本書は先行する近世の類題和歌集『林葉累塵集』『萍水和歌集』『麓の塵』『鳥の跡』に漏れた秀歌を集めたものだという。このうち『鳥の跡』は、本書の出版された前年（元禄一五年）に刊行された、編者の師・戸田茂睡の編である。実質的に本書はこの『鳥の跡』の続編に相当するものである。

挿絵は、所収の和歌に詠まれた風景・景物を歌人の姿と共に描いたもの。絵師は不明。一丁に表裏二図ずつ載せられている。本書の場合、本文に匡郭はないが、挿絵部分は四周单边（一九・〇糎×一三・五糎）の匡郭がある。丁付はない。

每半葉一〇行の江戸板。字高は一九・五糎で、おおよそ挿絵の匡郭と大きさを併せてある。

なお、本書は和学講談所の旧蔵である。

#### 【書誌】

外題・「和歌さゝれ石 上（下）」左肩墨書打付

内題・「和歌さゝれ石」

表紙・改装香色布目型押表紙（二二・八糎×一六・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①六三丁（一六図）、②八三丁（一六図）

匡郭・なし（挿絵匡郭一九・〇糎×一三・五糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

②八三ウの本文末尾に掲載されている刊記は以下の通り。

「元禄十六年癸未年仲秋良辰／武陽西北書林 燕雀堂 平野屋吉兵衛梓」

平野屋吉兵衛は江戸牛込肴町の書肆。燕雀堂と号す。元禄から宝永ころにかけて活動していた。

刊記に「武陽西北」とあるのは、店を構えていた牛込が江戸の中心部から見て西北にあるため。

本書の出版される五年前の元禄一一年には、編者の師・戸田茂睡の『梨本集』を出版している。本書の出版を手掛けたのも、先にそういった関わりがあったためと思われる。

【一二二】和歌さゝれ石 元禄一六年刊 六冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇一・〇〇五五」

本書は前掲『和歌さゝれ石』の同版本である。ただし、前掲書と異なり、合冊されていないので二〇巻六冊の出版時の形態である。

本書の場合、元題簽を保持しており、そこには角書で「鳥跡後集」と出している。これは前述したように、本書が戸田茂睡の『鳥の跡』の続編として編まれたことによるもの。

版木の状態はやや磨滅がみられるものの概ね良好。前掲書よりやや鮮明ではあるが、磨滅の程度からみてほぼ同時期に刷られたものと思われる。一部の挿絵に朱が入っているが、版元によって着色されたものではなく落書だと思われる。また④一九才（裏見返し）に墨で落書あり。

また、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に墨印で「番外書冊」とあり、それに併せて「和歌雑詠」の紙片が貼付されている。「番外書冊」は主に四庫・地誌以外の国書に押印されるもので、これに併せて分類名が紙片で貼付される。表紙に付けられるものなので、はがれたり、上から別の蔵書表が貼付されるなどの場合も多い。

【書誌】

外題・「鳥跡／後集／新歌さゝれ石 一（〜六）」中央無地料紙刷題簽（一六・五糎×三・五糎）

内題・「和歌さゝれ石」

表紙・原装縹色草花文様表紙（二二・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二六丁（六図）、②一五丁（四図）、③二二丁（六図）、④一八丁（四図）、⑤三二丁（六図）、⑥三三丁（四図）

匡郭・なし（挿絵匡郭一九・〇糎×一三・五糎）

印記・「番外書冊」（表紙右肩に墨印）「和歌雑詠」（表紙に紙片貼付）「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

⑥三三ウの本文末尾に掲載されている刊記は、以下の通り前掲書と同一である。

「元禄十六年癸未年仲秋良辰／武陽西北書林 燕雀堂 平野屋吉兵衛梓」

【一二三】和歌継塵集 宝永七年刊 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇一・〇〇四九」

なお本書は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「和歌継塵集 全」

内題・「和歌継塵集」

表紙・改装香色布目型押表紙（二一・〇糎×一五・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・一〇六丁（二五図）

匡郭・本文、挿絵ともになし。

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書の末尾記載の刊記は以下の通り。

「宝永七庚寅年正月吉且梓行／帝都 御書物所出雲寺和泉掾」

本書は宝永七年の初版で、その後、版を重ねることはなかったようで、別の刊記を持つものは今のところ見当たらない。一二巻一冊で出版されたが、慶應義塾大学所蔵本は分冊されて一二巻五冊。

版元は京の出雲寺和泉掾。松栢堂と号した。本姓は林氏。近世期を通じて出版に従事した最大手の書肆で、京店、江戸出店ともに御用書肆を務めた。本書は京店の手によるもの。

【一二四】武家百人一首 元禄一六年刊 一冊

浅草文庫旧蔵「請求番号二〇一・〇四〇九」

本書は榊原忠次の手によるといわれている異種百人一首『武家百人一首』に、挿絵を添えて出版した絵入和歌集のひとつ。

『武家百人一首』は古今の武将の歌を、小倉百人一首の体裁を借りて編

本書は宝永七年に出版された近世類題和歌集のひとつ。総歌数は八〇三首。一二巻一冊。この書名は、編者跋文によれば、近世期に編集された類題和歌集『林葉累塵集』『萍水和歌集』等の「遺塵を継ぐ」意である。先行する歌集を引き継ごうとした姿勢は、前掲の『鳥の跡』や『和歌さゝれ石』同様であるが、この二書を本書は無視しており、対抗意識ないし批判精神からくるものではないかと考えられている（『古典文学大辞典』『和歌継塵集』上野洋三）。撰録された歌人は京極高山・清水宗川等八二名で、大名・旗本等武家が中心である。

編者は坂静山。烏丸光雄を師とした歌人で多くの著作を残している。初め常淳、後に光淳と名乗る。生まれは尾張愛知とされるが、浪人してのち江戸に住んだ。本書はその著作のうちでも初期のものに相当する。宝永七年に本書を出版してのち、享保一七年に『和歌山下水』、元文四年に『和歌和泉杣』などの近世類題和歌集を編集して出版した。他にも烏丸光広の『面授口決』を写して後世に伝えるなどした。他に『用心私記』など。「怠らず行かば千里の末も見ん牛のあゆみのよしおそくとも」の詠歌で知られている。

本書には一五図の挿絵が添えられている。いずれも和歌の情景を描いた風景画である。本書には本文・挿絵ともに匡郭がない。字高は一八・〇糎。絵師未詳。一ウ左下に絵師の印（墨印陰刻）と思われるものが刷られているが、改装の際に綴じなおされたせいでのどが開かず、判然としない。

一〇四才から一〇五ウまで「作者大概目錄」として、収載歌人の一覧が載る。計八三名。

集したもの。『武家百人一首』の成立は万治三年頃と考えられているが、静嘉堂文庫に万治三年の奥書をもつもの、また当文庫に寛文元年の奥書を持つものなどが現存している。初期の段階では主に写本で享受されたため、寛文六年に二巻二冊で出版された際も、挿絵は添えられていなかった。初めて絵が入られたのはこれに続く寛文一二年版で、菱川師宣の手による。これを引き継いで再版されたのが、元禄一六年版の本書に相当する。本書の他にも刊年不明版が存在し、版を重ねたことが推察される。

編者は榊原忠次といわれる。江戸後期の国学者尾崎雅嘉が、和書の書誌解題を網羅した著書『群書一覽』の中でそう指摘した。

榊原忠次は、上野館林藩主。もとは遠江横須賀藩主松平忠致の長男として生まれ、その遺領を継いだ。のちに幕命により叔父の榊原康勝の家督を継いで父の実家である館林藩の藩主となった。その後、白河藩、姫路藩に移封されている。親藩の大名であり、かつ歌人としても著名で、烏丸光広に師事していた。そのため、和歌にまつわる著作は多く、『新葉和歌集作者部類』『続作者部類』『本朝各国名所詩歌』『武詠聚玉』など多くを挙げることができる。他にも有職故実の書『かさねのいろめ』などの著作があり、また、蔵書家としても知られている。没年は寛文五年。『武家百人一首』の初版は没後のことである。

挿絵は小倉百人一首に倣い、上部に和歌、下部に歌人の肖像が入れられている。本書の場合、扉などはなく、一オウ五〇ウまで一〇〇首一〇〇図が並ぶ。絵師の署名はない。

収載された歌人は六孫王源経基から室町幕府一代將軍足利義高まで、平安時代から室町時代に至るまでの武将百人。おおよそ時代順に配列されている。源平合戦の武将や、南北朝期の武将が多い。歌人として著名な武将も載るが、おおよそ武芸のほうに秀でていたような人物も歌人として収載

されている。本書の跋文によると歌の良し悪しではなく、武将として著名ないし歌人として著名な人物を漏らさず集めたという。

本書はおそらく和歌の入門書として用いられて普及したと思われる。

また本書と同名の別書も多く存在する。主なものでは、安政五年刊、賞月堂主人編、玉蘭斎貞秀画のもの。体裁は本書と似るが、冒頭に見開き八図の歴史画が載る。多色刷り。収載された歌も比較すると二三人が別人の歌に置き換えられていることがわかる。また明治四二年刊、富田良穂の撰による『武家百人一首』も存在する。時代の幅が広く、神代から幕末までの武将の和歌を採録、その夫人をも含む広い内容を持つ。これらは本書の影響下に成立したものと考えられる。

なお、本書は浅草文庫由来のもの。それ以前の旧蔵者は不明。

#### 【書誌】

外題・「武家百人一首」左肩無地料紙題簽に墨書（一九・二糎×三・五糎）

内題・「武家百人一首」

表紙・改装代赭色表紙（二六・〇糎×一八・五糎）

墨付丁数・五二丁

挿絵枚数・一〇〇図

匡郭・四周单边（二一・二糎×一五・八糎）

印記・「浅草文庫」

備考・挿絵（一オウ五〇ウ）、跋文（五一オウ五一ウ）。跋文は毎半葉一

〇行。

以下、跋文。

「和歌は我国の風俗として皆人のもてあそひと／なれり。武門の身にしては弓馬のいとなみしけ／く候て以学に心をよする暇なかるまし。されとも／古今集の序に貫之がかけける言葉にたけき／ものゝふの心をなくさむるは

うたなりと／いへるためしに源平ふたつの家のみにあらず／もろくの武将  
和歌をつらね侍るもおほければ／京極黄門の小倉山庄の障子にかきをか  
／けるかすになそらへて武士百人の歌をひとつ／つゝかきて武家百人一首  
と名付侍るにこそ（五一ウ）／しかあれど歌のよしあしをえらひきたむる  
に／あらず。撰集に入ても歌のかすすくなくひ／とりひとつふたつのた  
くひおほしあるはかなふ／みにみえ侍るなどをめにふるゝを幸にして／唯武  
将の名たかきをもらさすうたにほまれ／ある人をも捨かたくかきあつめ武  
士百の名をあ／らはし侍らんとためならんかし」

【刊年・刊行者】

本書末尾記載の刊記は以下の通り。

「元禄十六歳六月上旬 林正五郎板」

本書は寛文六年版、寛文二二年版に続く元禄一六年版。現存点数も多く、  
先の版よりも広く流布したようである。

林正五郎は京の版元。林庄五郎と同一か。元禄頃から享保頃に活動して  
いたと思われるが、未詳。

【一二五】〔名所和歌百人一首〕 貞享三年刊 一冊

内務省旧蔵〔請求番号二〇一・〇四一四〕

本書は『名所和歌百人一首』または『名所百人一首』の書名で知られる  
異種百人一首のひとつ。著名な歌枕を詠んだ和歌を配し、挿絵と共に一〇  
〇首を撰集したもの。一冊。初版は貞享三年。元禄六年の別版が存在する。

編者・絵師共に不明。二才から五一ウまで、画面上部に和歌、画面下部  
に歌人の肖像が描かれる。伝統的な歌仙絵の構図で、筆致は師宣風である。

匡郭外の上部に、和歌に詠まれている名所が横書きで書かれている。

撰録された歌人は後嵯峨院（石清水）から小野小町（井手）までの一〇  
〇人。時代順に配列されていた前掲書と異なり、畿内の歌枕を京から始ま  
り京へと戻ってくるように並べている。序文には百人一首かるたについて  
の記載があり、当時の百人一首享受についての様子がわかる貴重な資料で  
ある。

紙の状態は悪い。序文は毎半葉一〇行。本文・刊記ともに同じ筆跡のた  
め、同一の筆耕が書いたと思われる。

本書に似た系統のものでは、寛文三年に江戸の名所を詠んだ一〇〇首を  
並べた『江戸名所百人一首』が出版されており、また『江都名所百人一首』  
『倭名所百人一首』なども出版されている。

なお、本書には旧蔵者のものと思われる「養閑齋蔵書記」の印記がある。

【書誌】

外題・「名所和歌百人一首 全」左肩無地料紙題簽に墨書（一七・五糎×  
四・〇糎）

内題・なし

表紙・改装縹色表紙（二五・〇糎×一九・二糎）

墨付丁数・五二丁

挿絵枚数・一〇〇図

匡郭・四周単辺（二〇・八糎×一八・〇糎）

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「養閑齋蔵書記」

備考・序文（一ウ）、挿絵（二才く五一ウ）、刊記（五二才）。刊記部分に  
落書「安永四年乙未年迄凡九十年也」

【刊年・刊行者】

本文末尾（五二才）記載の刊記は以下の通り。

「貞享三年丙寅九甲板奥 京蛸薬師通堺町／喜平／平野屋喜右衛門」

本書は貞享三年の初版。別版に元禄六年版があるが、現存点数は多くない。

版元は平野屋喜右衛門、平野屋喜平とも。京蛸薬師通堺町角に店を構えていた書肆と思われるが、出版点数が多く残っておらず詳細は不明。貞享五年版『衣更着物語』の版元でもあり、貞享年間を中心に活動したとみられる。

【一二六】自然齋玄無法師歌集 文久元年刊 三冊

昌平坂学問所「請求番号二〇一・〇六八九」

本書は真言宗の僧侶玄無の詠草を、春夏秋冬恋雑に分類して配列した和歌集である。文久元年跋刊。二巻三冊。後序によれば玄無の没後、その子が遺稿をまとめて上梓するに至ったようである。

作者の玄無は、伊勢の阿濃郡津の人。本姓川喜多氏、俗姓菅原氏、通称久太夫、諱を光盛。享保七年に出家して嵯峨に隠棲。武者小路実陰に師事して和歌を学んだ。実陰の没後は、その子高松重季に学んだ。宝暦五年に七十一歳で死去。北野天満宮に参籠して詠んだ「おもひ寝の心の花にしをりして夢に分け入るみ吉野の山」の一首が、霊元法皇の叡感を賜り、「賤の男が心をよする伊勢の海もくづのうち玉のあるとは」の一首を下賜された。玄無の師であった武者小路実陰は、まさに霊元院に「三条西実隆以来の歌詠み」と称された優れた歌人で、中御門・桜町二代の帝の和歌師範を務めた。霊元院のもとで享保年間歌壇の中心を成した人物である。玄無はこの実陰の影響を強く受けており、自然で優美なその詠風を受け継いでいる

といわれている。本書はその唯一の歌集。

本書には扉としての挿絵が序文に添えられている。一ウ・二オに見開きで南画風の伊勢の風景を描いたもの。序文の末尾四ウに、作者である玄無の肖像画が添えられている。手彩色。故人を偲んで添えられたものと思われる。絵師未詳。

本書は上下巻三冊。上巻が二冊に分けられている。一オウ四ウまでが序文。三冊目、本文末尾に漢文の後序、和文の跋文。後序の年記は「宝暦某年」となっており、本書の成立が作者没後間もないことがわかる。

なお本書は昌平坂学問所の旧蔵。「慶應丁卯」の朱印が押されており、慶應三年の新収であることがわかる。和歌雑詠のうちの一として収集された。

【書誌】

外題・「自然齋玄無法師歌集 上(中・下)」左肩四周双边刷題簽に墨書(一六・三糶×三・〇糶)

内題・なし

表紙・改装縹色布目型押表紙(二二・五糶×一六・五糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①四〇丁(三図)、②三五丁(〇図)、③三二丁(〇図)

匡郭・四周单边(一九・〇糶×一三・三糶)

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」「慶応丁卯」「昌平坂」(墨印)「番外書冊」(墨印)「新刊納本」(墨印)「和歌雑詠」(紙片貼付)

備考・「番外書冊」「新刊納本」「和歌雑詠」の印は表紙。

【刊年・刊行者】

本書に刊記の記載はなく、正確には出版年は不明である。後序の年記は「宝暦某年」となっており、成立は作者没後もない時期と想像されるが、跋文の年記は文久元年となっているため、本書はそれからまもなく出版さ

れたものであろう。本書の現存点数の多いものはこの文久元年版だが、九州大学には跋文の後ろに「爾然法師歌集附録序 慶應丁卯小春 津藩川村尚迪識」の記載をもつ慶應三年版が所蔵されている。

本書の表紙には「新刊納本」の印記があり、これは昌平坂学問所が新刊書を収集した際に押印したものである。本書の場合、刊年の記載はないが、九州大学所蔵本同様、慶應三年に出版されたものである可能性もある。

【一二七】室八嶋 宝暦六年跋刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇一・〇六一」

本書は近世の女流歌人石塚倉子の詠草をまとめた私家集である。春夏秋冬恋雑と、伝統的な和歌集の部立を踏襲しつつ、『古今和歌集』の羈旅歌に相当する部分には下野・上野を旅した「日光紀行」「妙義紀行」「館府八景」の紀行文を配置する構成となっている。これに「機樹百詠」と釈神祇・賀を加えて一〇巻五冊。序文によれば成立は寛延元年ころ。序者には国学者の荷田在満、儒学者の服部南郭。

石塚倉子は下野国都賀郡富吉に生まれた豪農の娘であった。兄弟は六人いたが、兄の意向で最終的に婿を迎えて石塚氏の家督を継いだ。近世前期の代表的な在野の女流歌人で、その和歌の才から今小町と称されるほどであった。他に『楓百首』（宝暦六年刊）などの著作がある。宝暦八年に七三歳で没した。

書名の「室の八嶋」は、下野国惣社の大神神社にあるとされる歌枕で、松尾芭蕉の『おくのほそ道』にも詳述される。境内の池にある八つの島を室の八嶋と称し、この清水から生じる煙が、恋に身を焦がす煙に例えられ

て多くの和歌に詠まれた。しかし、芭蕉が訪れたときすでに池はなく、石塚倉子もまたその痕跡を見るだけであったと思われる。倉子の出身地である下野の代表的な歌枕であったため、書名にとられたのであろう。

後半部分に当たる紀行文は、二荒山や浅間山などへの旅日記に、同地で詠んだ和歌が添えられている。一見すると特殊な部立構成だが、『古今和歌集』などの勅撰集における羈旅歌に当てている。特徴的なのは「機樹百詠」と立てて、紅葉を詠んだ百首を並べたものである。石塚倉子は恋歌より季節の歌を得意とし、自ら「春秋亭」と称した。『古今和歌集』を重んじたのも、当時隆盛期にあった村田春海・加藤千蔭ら江戸派の影響であると思われる。

本文に匡郭はなく、写本の体裁に似る。每半葉七行。字高一五・〇糎。⑤二〇ウには「此書用心之友需染禿筆畢 篠崎巴水」と筆写者の署名がある。挿絵は、和歌の内容や、紀行文中の景物に併せた山水画風。絵師は竈玉川安定とあるが、一部別の絵師が担当した箇所もある。いずれも一丁に表裏の二図連続。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙に「番外書冊」「昌平坂」「和歌雑詠」の墨印を見ることができ。ただし、いずれも所蔵先が改められた際に消そうとされた見え、不鮮明なものが多い。

【書誌】

外題・「室八嶋」左肩墨書打付 ※④のみ四周双边刷の後題簽（一六・三糎×三・二糎）

内題・なし

表紙・改装砥粉色布目型押表紙（二二・二糎×一六・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二六丁（六図）、②二四丁（八図）、③三五丁（一六図）、④二五丁（四図）、⑤二六丁（二図）

匡郭・なし（※字高一五・〇糶）

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」「番外書冊」（墨印）「昌平坂」（③④表紙右下）「和歌雑詠」（⑤表紙）

【刊年・刊行者】

本書の刊記には刊年の表記を欠くため、正確な出版時期は不明であるが、跋文の年記である宝暦六年からは離れないと思われる。本書⑤二六才の刊記は以下の通り。

「書林 大坂心齋橋順慶町 渋川清右衛門／京堀川錦上ル町 西村市郎右衛門／江戸本町三丁目 西村源六」

本書の初版の版元は須原屋茂兵衛。本書はその後刷で三都版。本書の刊記は内容を改めた一丁を後補したもの。大坂の渋川清右衛門・京の西村市郎右衛門共に上方を代表する巨大書肆である。江戸の西村源六は文刻堂と号した書肆で、元禄頃から幕末まで活動した。京の西村と同族か。

【二二八】残香集 明治二一年刊 二冊

旧蔵者不明【二〇一・〇七三〇】

本書は近世後期の歌人・香川景嗣の歌集。明治刷。二巻二冊。

香川景嗣は、京の人で油小路家の家臣伏田家の生まれ。のちに梅月堂四世・香川景柄の門人となり、和歌を学んだ。折しも、香川景柄の養子であった香川景樹（歌人・国学者、桂園派を創始）は、斬新な歌風を提唱、江戸派の歌人たちと激烈な論争を巻き起こしていた。経済的な理由もあり、最終的に香川景柄は景樹を離縁して、別家を立てさせ、その代わりに本書の作者である景嗣を養子に迎えた。景嗣は景樹と異なり、二条派宗匠の保守

的な家風を後世に伝え、当時の京都歌壇の中心となった。他に『黄中詠藻』『梅月堂詠草』などの著作がある。慶應元年に七四歳で没した。本書はその没後に曾孫の香川景次郎の手によって出版された唯一の家集である。なお、同名の書に桜井梅室追善の俳諧集があるが、本書と直接の関連はない。本書には扉絵として梅の木が山水画風に描かれている。作者が継いだ梅月堂の名と、署名『残香集』を踏まえたものと思われる。体裁は近代以前の和本に同じ。每半葉九行。

本書の旧蔵者は不明だが「明治廿一年納本」の朱印があることから、新刊書として収められたものと思われる。

【書誌】

外題・「残香集 上（下）」左肩黄色料紙四周双辺刷題簽（一五・〇糶×二・六糶）

内題・「残香集」

表紙・原裝砥粉色布目型押表紙に水色で着色（二一・二糶×一四・五糶）

墨付丁数・①四四丁、②三〇丁

挿絵枚数・①一丁（扉）

匡郭・四周単辺（一五・五糶×一一・五糶）

印記・「日本政府図書」「明治廿一年納本」「版權登録」

【刊年・刊行者】

②三〇才に記載の刊記は以下の通り。

「明治廿一年十一月三日印刷／同年同月五日出版／定価金四拾五錢／著作  
者相続者 京都府平民 故香川景嗣曾孫 香川景次郎 上京区第三拾四組  
岡崎町百八十六番戸／発行者兼印刷者 京都府平民 中村新太郎 下京区  
第二拾五組富田町六番戸」

この刊記により、作者の曾孫にあたる香川景次郎が版權を相続して、本

書の出版に至った事情が読み取れる。

【一二九】桜園集 明治二五年刊 一冊

旧蔵者不明「請求番号二〇一・〇七三一」

本書は幕末の動乱期に活躍した幕臣大久保一翁の詠草をまとめた家集。編集にあたったのは勝海舟で、明治二年に没した一翁の追善として出版したもの。金属活字版。和装。九卷附一卷一冊。

大久保一翁（大久保忠寛）は、身の低い旗本の子として生まれたが、その才能を見込まれて老中阿部正弘に登用されてから、幕閣の中心的存在となった。一橋派に連なると看做されて幾度が失脚を味わうものの、大政奉還を前提とした諸侯会議・公議政体論を唱え、後年には、議会制を主張した先覚者と評される。江戸城無血開城に尽力したことで知られ、勝海舟を取り立てた上役にも当たる。本書の出版はそうした経緯によるもの。

本書の冒頭には、明治二〇年に撮影した一翁の写真が載る。近代以前の追善家集には、著者の肖像画が載ることが多かったが、本書は肖像の代わりに写真を掲載した初期の例である。このときの歌に「なにひとつ世のためはせでまうつしにのこす姿のはずかしきかな」とある。この写真を撮影した翌年に七二歳で死去。書名の「桜園」は一翁の雅号のひとつである。本書の二才には自筆和歌を転写したものが載せられている。一才・二才に写真の転写が印刷されているため、第一丁から第四丁までは、本文部分と異なる厚手の料紙が使用されている。

第三丁から四丁まで勝海舟による序文。整版印刷による自筆版下。

以降の本文は、古来の和歌集の伝統に則り、春夏秋冬雑に長歌を並べ、

さらに数作の文章を加える。附録として巻末に『大久保世記』一卷を附す。なお、本書の旧蔵者は不明。新刊として収集されたものか。

【書誌】

外題・「桜園集 全」左肩四周双边刷題簽（一五・〇糎×三・〇糎）

内題・「桜園集」

表紙・原装海松色布目型押表紙（二二・五糎×一五・三糎）

墨付丁数・六九丁

挿絵枚数・二函

見返し・「明治壬辰初冬印行／桜園集／海舟書屋蔵板」

匡郭・四周双边（一七・三糎×一二・〇糎）

印記・「日本政府図書」「第一九六号」「廿六年一〇九日納本」

備考・印記に一部欠有り。

【刊年・刊行者】

六九才記載の刊記は以下の通り。

「明治廿五年十二月二十六日印刷／明治廿五年十二月二十七日出版／（非売品）／編輯兼発行者 勝安芳 東京市赤坂区赤坂氷川町四番地／印刷人 根岸高光 同牛込区市谷加賀町一丁目廿三番地／印刷所 秀英舎 同京橋区西紺屋町廿六七番地」

刊記にも発行責任者として勝海舟の名が載る。印刷を手掛けた秀英舎は、現在の大日本印刷の前身。明治一〇年には『改正西国立志編』を印刷、国産初の洋装本を世に出した。明治一五年には金属活字の鑄造・販売を始めている。株式会社化したのは本書出版の翌年のことである。昭和一〇年に日清印刷と合併して現在の社名になった。

【一三〇】世中百首絵抄 享保七年刊 一冊

内務省旧蔵「請求番号二〇一・〇四二〇」

『世中百首』は大永五年に連歌師荒木田守武が撰した教訓和歌書で、本書はそれに絵師川島重信が挿絵を添えて享保七年に刊行したものである。一卷一冊。版によつては三冊本も存在する。本書を始めとして、近世期の版本によつて流布した。

卷末の歌に「世中の大永五年長月のかのへさるの夜百首よむ也」とあり、守武五三歳の大永五年九月に成立したとわかる。教訓的な和歌を百首連ねた内容となつていて、歌の中に必ず「世中」という言葉が詠みこまれてるのが特徴である。「世中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのもしきかな」「世中は目にみる事をほんとせは聞ぬることはかはる物也」等。忠孝を基軸とした儒教的道徳規範が、和歌によつて簡潔に示されており、『伊勢論語』の別名がある。これは守武が伊勢神宮禰宜の家系である荒木田氏であつたため。

荒木田氏の家系は、外宮の神官である度会氏と共に平安末期から文芸活動を盛んにしていたといわれる。守武の母方の祖父にあたる藤波氏経の周辺には連歌壇が形成されており、守武はこうした環境の中で連歌を学び、伊勢神宮禰宜として宗教性の強い連歌興行をしばしば行つた。『荒木田集』『法楽発句集』などに多くの独吟が載る。また連歌のみならず、和歌・俳諧にも通じており、特に和歌に関しては『守武千首』等が有名である。俳諧に関しては文学史的に評価が高く、以降の談林派に大きな影響を与えたといわれている。

『世中百首』はその守武の和歌における代表的な作品である。伊勢神宮徴古館には、守武自筆本が所蔵されている。本書はそうして流布した『世

中百首』にさらに絵を加えて、享保七年に刊行したもの。挿絵が加えられて内容がわかりやすくなったこともあり、さらに読者層を広げたと思われる。和歌書でもあるが、主に道徳の教科書として用いられた。

ただし、広く流布するきっかけとなつたのは、本書よりものに出版された寛政一〇年の出版であつたとされている。寛政一〇年版の序文によれば、本書は天明八年の火災によつて版木を消失している。

絵師は川島重信。京の人で、西川祐信の門人。号は柳花堂、一々堂など。享保から寛保頃を中心に活動した。肉筆画では「立姿美人図」が現在、出光美術館に所蔵されている。

注釈は講古堂藤原屋と号した加藤忠治。他に紀行『神宮参拝記』『伊勢参宮按内記』などの著作がある。共に宝永四年刊。

本書は每半葉を上下二段に分け、上部を頭注、下部を挿絵に当てている。每半葉に一首が掲載され、挿絵の内容はその和歌の内容に即したものとなつている。その描き方は当世風の風俗を描く場合もあれば、『伊勢物語』の「芥川」の絵を引いており、和漢の故事を引くなど、様々である。三ウには荒木田守武の肖像を載せる。一才から二ウまで序文。三才には荒木田氏系図。

なお本書は内務省の旧蔵。それ以前に関しては、旧蔵者のものとみられる「養閑齋蔵書記」の印記がある。

刊記の前に広告が入る別版がある。

#### 【書誌】

外題・「守武／世中百首絵抄」中央四周双边刷題簽（二六・〇糎×三・八糎）

内題・「世中百首絵抄」

表紙・改装紺色亀甲繫艶出表紙（二六・〇糎×一七・〇糎）

墨付丁数・五五丁

挿絵枚数・一〇一図

匡郭・四周单边（一九・五糎×一四・三糎）、頭注（四・五糎×一四・三糎）、絵（一四・三糎×一四・三糎）

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「養閑齋蔵書記」

備考・序文は毎半葉八行、頭注は最大で一九行。

【刊年・刊行者】

五五才記載の刊記は以下の通り。

「享保七壬寅年／正月吉日／絵師 洛陽川原町 川嶋重信／書林 勢州山田一志 藤原長兵衛／京寺町松原上ル町 今井七郎兵衛」

刊記によれば本書の出版は享保七年。他に天保二年版、天保六年版、天保一五年版がある。

版元として記載のある藤原長兵衛は、伊勢の書肆。講古堂。伊勢神宮御用格として創業したため、度会氏や荒木田氏と深い関わりがあり、本業は豊受大神宮に属する御師であつたとされるが、文化初年に『伊勢二宮一社伝』の出版で両宮の優劣を論じてはならないという禁制に触れ、まもなく御師職を解かれたと指摘されている。書肆活動はやがて講古堂加藤氏に引き継がれて、明治まで続いた。編注はこの講古堂加藤忠治によるもの。

今井七郎兵衛は京の書肆で、一般的には菊屋七郎兵衛。菊花堂とも。京寺町松原上ル西側に店を構えていた書肆で、近世期全体を通じて活動していた。宝永四年版『伊勢参宮案内記』の版元でもあり、元々伊勢神宮や、その著者である藤原長兵衛と関わりがあつたことから、本書の出版につながつたとみられる。宝永二年におかけ参りがあり、それに当て込んだ出版を多く手がけた。浮世草子の版元として著名である。蔵版目録が宝暦一三年版『女今川姫鏡』に載る。

【一三一】農耕百首 嘉永五年序刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇一・〇三九九」

本書は歌人太田子徳による家集で、その題の通り農作業に関する和歌を百首詠み上げたもの。刊年は定かではないが序文に嘉永五年の年記がある。一冊。

太田子徳は農民でありながら名を挙げた幕末の歌人である。名を三左衛門。荏原郡深沢村（現在の東京都世田谷区）の人。農民の生活や江戸郊外の自然を詠み、牧歌的な歌風をよくした。その師といわれている本間遊清は伊予吉田藩の藩医を務めた本草学者で同時に国学者である。村田春海らの江戸派に学び、歌人としては江戸屈指の誉れをとつた。平田篤胤・伴信友らと並び「和学三大家」にも称され、近世後期から末にかけての国学を牽引した人物であつた。だが、その門人である太田子徳については、詳細な来歴は不明である。本書の他には嘉永五年版『江西三十八勝詩歌』などが挙げられる。

本書には匡郭がなく写本風で、伝統的な家集の体裁をとる。毎半葉八行。字高一六・〇糎。挿絵は序文のあとに四図載る。一図目は農民たちの田おこし・代かきの様子、二図目は五月女による田植えの様子、三図目は稲刈り・収穫の様子、四図目は脱穀の様子となつていて、稲田をめぐる一連の様子が順に絵面化されている。絵師未詳。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に「番外書冊」の墨印が押されており、また「和歌雜詠」の紙片が貼付されている。

【書誌】

外題・「農耕百首 全」左肩無地料紙刷題簽（一八・〇糎×三・三糎）  
内題・「農耕百首」

表紙・改装縹色布目型押表紙（二三・〇糎×一六・〇糎）

墨付丁数・二二丁

挿絵枚数・四図

匡郭・なし、字高（一六・〇糎）

印記・「番外書冊」「和歌雜詠」「浅草文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

二一才に記載の刊記は以下の通り。

「荏原郡深沢村 三左衛門 著／江戸書林 市ヶ谷本村町 石井佐太郎」

荏原郡深沢村三左衛門は作者の太田子徳のこと。版元の石井佐太郎は、

一般には河内屋佐太郎。奎文閣を号す。近世後期を中心に活動した。明和二年版『柳多留』の版元。

【一三二】 釈教三十六人歌仙 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇一・〇三七七」

『釈教三十六人歌仙』は、貞和三年頃、勸修寺栄海によって撰せられた奈良・平安時代までの歌僧三十六人の歌を集めた秀歌撰である。冒頭は達磨和尚。東京国立博物館に所蔵されている絵巻断簡は、成立からまもなく製作されたものと考えられており、重要文化財に指定されている。

古今の高僧を往生した年代順に配列し、著名な和歌を載せる。釈教歌には限らず、勅撰集に採用された秀歌を中心にする。達磨に対して聖徳太子を載せるのは、太子が前世に達磨と出会っていたという説話をもとにした

もので、他にも行基と婆羅門僧正など同様の説話の影響がみられる。これらは先行する中世の歌学注釈に多くみられるもので、具体的にいずれの歌学書を参照したかは不明であるが、編者の栄海がこうした中世的な歌解釈の中に位置づけられるのは間違いない。また、三十六人の僧を選出したのは、先行する三十六歌仙に影響されただけでなく、三十六の僧の肖像において、金剛界曼荼羅の成身会を模したとも指摘がなされている。事実、栄海が生きた時代は南北朝の混乱期であり、密教的な国家再建への意識があつたともいわれている。

栄海は鎌倉時代末期から南北朝期にかけて活動した真言宗の僧侶であり、伝記集『真言伝』の著者でもある。また多くの講式を作文し、勅撰集に入集した歌人でもあつた。

本書は寛文元年に林和泉掾から絵入版本として出版されており、一般に流布したのはこのころ。本書はその版本を元に書写し、手彩色した絵入写本である。

料紙は楮紙で、絵本に仕立てるにはあまり質がよくないものを袋綴にしてある。それよりやや質のいい紙に描かれた歌僧たちの絵を、その部分だけ切り抜いて毎半葉ずつ貼り付けている。別の絵巻から切り抜いて草紙に仕立てたか、元から草紙にするつもりで別の紙に描いたものをあとで貼り付けたかのいずれかであるが判然としない。ただし、絵の具にわずかではあるが一部に金泥が用いられており、絵そのものは良質のもの。絵を貼り付けたあとに、空いた箇所には和歌を書き入れてある。

なお、本書は和学講談所の旧蔵書。

【書誌】

外題・「釈教歌〔欠〕」中央黄色料紙題簽（二一・〇糎×四・五糎）

内題・「釈教三十六人歌仙」

表紙・改装縹色表紙（二六・八糎×二〇・三糎）

墨付丁数・二二三丁

挿絵枚数・三六図

匡郭・なし

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・題簽の下半分欠。

【写年・筆写者】

本書には奥書がないため、写年・筆写者ともに不明。ただし、本書の元となったのは寛文元年版本であることは明らかで、少なくとも寛文元年以降の書写であることは間違いない。絵と本文の書写された年代が異なる可能性もある。

【一三三】歌仙部類抄 嘉永七年序 二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇一・〇四一八」

本書は鎌倉時代中期に成立した『女房三十六人歌合』に、女房たちの肖像を加えたもので嘉永七年に出版された。二冊。編者は国学者で歌人の橋本直香。絵師は高島千春ら。

『女房三十六人歌合』には平安期から鎌倉期にかけての主要な女性歌人とその代表作が網羅されている。藤原公任の「三十六人撰」を模倣して中に成立したもので、左方に小野小町から相模までの平安時代の歌人を、右方に式子内親王から藻壁門院少将までの鎌倉時代の歌人を配し、一人三首ずつ合わせた紙上の歌合である。古くから絵画化されており、現代に伝わるものには、斎宮歴史博物館蔵『女房三十六歌仙図屏風』『女房三十六

歌仙図屏風』、三井記念美術館蔵土佐光起筆『女房三十六歌仙帖』などを挙げるができる。本書はそこに国学者の橋本直香が注を加えた絵入りの注釈書である。

橋本直香は、名を鞆雄とも。薫園と号した。幕末から明治にかけて活動した国学者で歌人。橋守部のもとで、国学・和歌を学んだのち多くの門弟の育成に尽力した人物である。もとは上野国の飛脚問屋に生まれ、直香の代には機業も兼ねたが、振るわなかったこともあって四〇歳余で家産を捨てて江戸に出たという。他の著作に『紐鏡とき言』（嘉永二年刊）『万葉集中上野国歌』（安政六年序）『万葉私抄』（明治一八年序）など。明治二二年に八三歳で没。

女性歌人には来歴の不明な者も多いが、直香は様々な典拠を引くことによって伝記を書いている。こうした膨大な資料に基づく姿勢は師の橋守部の影響であるといわれる。なお、本書の自筆稿本が東京大学国文学研究室に所蔵されている。

挿絵は高島千春とその弟子の数人によって描かれたもの。高島千春は大坂に生まれた土佐派の大和絵師で、京錦小路高倉西に居住して活動していたが、文政頃に江戸に出て本所に住み、以降の活動の中心は江戸となった。有職故実に通じており『舞楽図』などの資料をまとめ、また古画の模写を多く残し遺風を伝えることに尽力した人物である。安政六年に八〇歳（一説には八三歳）で没。本書は七四歳のときに手がけたもの。

上巻のほとんどが高島千春の手によるものだが、下巻は弟子たちによって描かれたものが多く画風は様々。従来の歌仙絵にあるような女房の肖像画ではなく、他の女房たちと共に描かれたり、外出している様子が描かれるなど、物語絵の構図に近い内容を持っている。また二一ウには斎宮女御の絵姿が描かれるはずだが伊勢神宮の風景を描くことで、斎宮女御を連想

させる内容となつてゐる。他にも清少納言が雪を眺める姿など、『枕草子』の有名な段を元にしていたり、和歌の内容に基づいてゐるなど、必ずしもすべてが女房の絵姿ではない。また下巻六ウは、弟子の高島千秋が土佐光信の模写をしたものであるなど、内容は様々である。(原図未詳)

絵師については、本文末尾五二才に名簿の記載がある。以下の通り。

「右女房三十六人図／七十四翁 高島千春／門人補助 高島千秋／福島隣春／福島千山／竹川千洲／大高千載／橋本彦八蔵版」

また本書の末尾には『歌仙部類抄』の続刊の広告の記載がある。直香は各種『三十六歌仙』の出版を構想していたようだが、現存するのは本書の『女房部』だけであり、実現には至らなかったようである。

なお本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に「新刊納本」の墨印があり、出版に際して新収されたものと考えられる。

#### 【書誌】

外題・「歌仙部類抄 女房部 下」左肩無地料紙刷題簽(一七・〇糶×三・

二糶)

内題・「歌仙部類抄」

表紙・原装砥粉色地銀泥鶴丸鶴菱文様(刷)表紙(二三・〇糶×一六・

三糶)

見返し・「橋本直香著／歌仙部類抄 上下／薫園蔵版」

墨付丁数・①五四丁、②五二丁

挿絵枚数・①一八図、②一八図

匡郭・なし(※挿絵匡郭・四周单边一七・五糶×一二・七糶)

字高・一七・五糶

印記・「新刊納本」(表紙)「番外書冊」(表紙)「和歌雜詠」(紙片貼付・

下巻表紙のみ)「浅草文庫」

備考・上巻題簽欠。

#### 【刊年・刊行者】

本書に刊記の記載はなく、正確な刊年・刊行者は不明であるが、序文に嘉永七年の年記がある。版元についても不明だが、見返しに「薫園蔵版」、また五二才に「橋本彦八蔵版」とあり、薫園・彦八ともに作者の橋本直香のことであることから、私家版と思われる。

#### 【一三四】東北院職人歌合 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一八四一〇三七八」

『東北院職人歌合』は、鎌倉時代から南北朝時代ころにかけて成立したとされる「職人歌合」のひとつ。作者未詳。東北院の念仏会に集まった職能者たちが歌合せを行ったという設定で、月・恋の二題をあげる。判者は経師。作者は左右五人ずつの五番本と、十二人ずつの十二番本とがあり、本書は後者に当たる。左が医師・仏師・鍛冶・刀磨・巫女・深草・紺搔・塗師・博打・針磨・桂女・商人、右が陰陽師・経師・番匠・鋳物師・盲目・壁塗・薙打・檜物師・船人・数珠引・大原人・海人。五番本に比べて十二番本は判詞が詳細で、勝負の結果も異なる。一般的には五番本の成立が早く、十二番本はその増補改訂本であると考えられている。

十二番本の写本は多く現存。他に三熊思孝模写に基づいた寛政元年版本などがある。本書の場合、この十二番本の抄出。判詞には紙を継いで付け加えたと思われる箇所もある。字高、間隔、字の大きさなどもまちまちである。題簽には「健保職人歌合」とあるが、これは本書の仮名序が「健保二年」で始まるためこの呼び名がある、

写年・書写者ともに不明だが、末尾には「海北又又雪斎図之」とある。「又又雪」は海北友竹の印名。すなわち本書は海北友竹による絵巻を写したと思われるが、原図は現存していないため不明。落款も朱書きで写している。料紙は楮紙。虫損部分を修復済。卷子装一軸。すべて手彩色。本書は内務省の旧蔵。明治十三年に購入した。

【書誌】

外題・「健保職人歌合」無地料紙題簽（二三・九糎×二・八糎）

内題・なし

装丁・卷子装（縦二七・八糎）改装砥粉色表紙

字高・最大二六・〇糎

印記・「明治十三年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・字高は個所によって異なる。

【写年・書写者】

奥書を欠くため不明。ただし末尾に元の絵巻にあったと思われる海北友竹の署名がある。「海北又又雪斎図之（落款朱書）」元の落款も朱書で写している。海北友竹は承応三年生まれ享保一三年没。本書の書写は少なくともこれ以降である。文化・文政頃か。

【一三五】鶴岡放生会職人歌合 写年不明 一軸

内務省旧蔵 「請求番号一八四・〇三七九」

『鶴岡放生会職人歌合』は、室町時代に成立した職人歌合のひとつ。絵巻。『東北院職人歌合』を模して造られており、東北院の念仏会に対して鶴岡八幡宮の放生会を主題にしている。職人たちが鶴岡八幡宮の神主を判者

として歌合を行ったという趣向。月と恋の二題で、左右に様々な職人を配し、職人の絵姿と共に歌各二首と判詞を載せる。全十二番。『鎌倉職人歌合』『鎌倉職人尽歌合』『鶴岡放生会八幡宮歌合』などの別名を持つ。作者未詳。序文や職人名に漢語が多く見えることから、教養の深い人物であることが想定される。

歌と判詞が絵の余白に書き込まれるのが特徴で、室町時代の絵巻に多くみられる体裁。ただし成立に関しては鎌倉時代とみる向きもある。

松下幸之助旧蔵の一卷が絵を完備した最古の善本として有名。

絵はすべて白描で彩色はない。朱書で原本との校異など書き入れあり。

字高は二四・五糎。前掲書に比べて詞書の筆跡が美しく、原本を忠実に再現したと思われる。

本書は明治一三年に購入したもので、それ以前の旧蔵者は不明である。

前掲書と同時期に新収したものか。

【書誌】

外題・「鶴岡職人歌合」無地料紙題簽（二三・八糎×二・八糎）

内題・なし

装丁・卷子装（縦三三・〇糎）改装藍色表紙

字高・最大二四・五糎

印記・「明治十三年購求」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・朱書入あり。

【写年・書写者】

元奥書によれば以下の通り。

「右鎌倉職人歌合の一卷は安藤／惣右衛門定香にこひ求めて享和癸亥の／秋■陽錦城中写之／南石家平守昌」

これによれば原本は享和三年に書写されたもの。絵師については未詳だ

が、江戸の人と思われる。落款は墨書で写してある。原本の所蔵者は安藤惣右衛門定香とあるが、伝未詳。

【一三六】七十一番歌合 明暦三年刊 三冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号一八四・〇〇九九」

一般的な書名は『七十一番職人歌合』だが、他にも『職人尽歌合』『明応職人歌合』などの書名もある。室町時代に成立した「職人歌合」の一つ。月・恋の二題を掲げ、各番二首ずつ合わせるのは前掲の「職人歌合」と同様だが、本書に挙げられた職種が一四二種、計七十一番であり、「職人歌合」の中では最も多い。また歌合・判詞に併せて、職人のセリフが画中詞として書かれている点が特徴的である。三巻。作者未詳。

尊経閣文庫本、東京国立博物館本、群書類従本等が善本として伝わる。本書はこれらと同系統の本文をもとに製作された版本である。明暦三年、延享元年、寛政元年、文政九年、文政十一年、弘化二年と、近世期を通じて出版された。江戸時代中期の国学者による「職人歌合」の再発見がその大きなきっかけであったとみられる。

本書は明暦三年版。三巻三冊。版によつては匡郭を持たないが、本書の場合は挿絵に匡郭を持つ。各番ごとに二人の職人を描いた一図を配する。計七十一図。

本書は虫損・水損などで状態はあまり良くない。題簽も改められているが、第一冊目に関しては、見返し中央に元題簽と思われるものが貼付されている。（「職人尽歌合」一六・八糎×三・五糎）

第二冊目以降の題簽が誤っており、第二冊目が「下」、第三冊目が「中」

になっている。

本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に「番外書冊」の墨印がある。

【書誌】

外題・七十一番職人尽歌合 上（下）左肩四周双边刷題簽に墨書（一八・三糎×三・六糎）

表紙・改装砥粉色表紙（二六・〇糎×一六・八糎）

墨付丁数・①二三丁、②二三丁、③二五丁

挿絵枚数・①二三図、②二三図、③二五図

匡郭・なし（※挿絵・四周单边一九・〇糎×三・六糎）

字高・二八・五糎

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「番外書冊」

備考・題簽に誤りあり。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は③二五ウの第七十一番の挿絵の左下、枠内（六・五糎×三・六糎）に出してある。

「明暦三丁酉年仲冬吉辰／谷岡七左衛門行」

本書は明暦三年の刊行。明暦三年版には二種あり、もう一方は安田十兵衛と谷岡の相合版。本書は安田十兵衛の名前を入木で削つてある後刷版にあたる。

谷岡七左衛門は京の書肆。寺町通丸太町下ル。承応三年版絵入り『狭衣物語』の版元である。安田十兵衛も同じ寺町通に店を構えていた。

【一三七】江戸職人歌合 文化五年序 二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇一・〇三二〇」

本書は中世以来の「職人歌合」の伝統を踏襲した上で、近世の江戸の職人たちに置き換えて編集されたもの。序文の年記は文化五年。二冊。歌合は全部で二十番。採用された職種は四十種である。冒頭に名主を挙げるなど、その職種は近世を象徴するものとなっている。

作者は石原正明。江戸中期の国学者。尾張の農家の次男に生まれたが、学問を能くし、寛政四年に本居宣長の門に入る。のち江戸に出て塙保己一に入門し、学塾温故堂塾頭を務めた。『群書類聚』『類聚国史』の編纂に参加している。『花月百首』『冠位通考』など数多くの著作がある。有職故実のみならず特に和歌を能くし、多くの詠草を残している。

「職人歌合」は中世にその形式が成立したが、近世期に入ると、元來持っていた宗教的な意味合いが薄れ、博物的な興味関心から製作されるようになった。菱川師宣の『和国諸職絵尽』（貞享二年版）、『人倫訓蒙図彙』（元禄三年版）などがそれで、これらは主に「職人尽」と呼ばれる。本書もまたそうした流れの中に位置づけることもできるが、作者は国学者として中世の「職人歌合」に直接触れることで、本書の構成を得たとするのが一般的である。元奥書によれば、浅草寺で行われた歌合をもとに記録したというが、実際のところはすべて正明の自作であろう。「職人歌合」の先駆となった『東北院職人歌合』を意識して、場所を東北院から江戸の象徴である浅草寺に移して遊んだ戯作である。取り上げた職種は『東北院職人歌合』を参考にしているものの、努めて「江戸らしい」職人を選んで採ったと思われる。

本書の成立は文化二年。本文末尾に作者による跋文がある。

挿絵が一番につき二図ずつ、左右の職人を描いている。構図などは先行の「職人歌合」を参考にしているが、すべて近世の当世風俗である。絵師

は藤原春季。元奥書によれば浅草寺で行われた歌合せを磯部千貝なる人物が筆録し、藤原春季が挿絵に起こしたというが、磯部千貝・藤原春季ともに伝未詳。春季に関しては本書に序文を寄せた藤原泰周の兄弟にあたるようである。泰周は伊予の人で国学者。

匡郭はなく、判詞の字高は約一八・〇糎。毎半葉一〇行。

本書は内務省の旧蔵で、それ以前の旧蔵者は不明。

#### 【書誌】

外題・「江戸職人歌合」左肩無地料紙刷題簽（二七・八糎×三・六糎）

内題・なし

表紙・改装縹色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・〇糎）

墨付丁数・①二八丁、②四一丁

挿絵枚数・①二〇図、②二〇図

匡郭・なし

字高・一八・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

備考・①題簽欠。

#### 【刊年・刊行者】

本書の序文には文化五年の年記があり、刊年はそのところであると考えられる。ただし、版には数種類があり、それぞれ版元に違いが見られる。

本書の場合、②三〇ウの本文末尾に「板元 尾張名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎」とある。これが初版の際の刊記と思われる。本書にはこのあと三一オから四〇ウまで広告が入り、四一オに発行書肆として十三書肆の名前が記載されている。三一オ以降は、再販の際に挿入されたものと考えられる。四一オ記載の版元は以下の通り。

「江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／同 日本橋通二丁目 須原屋新兵

衛／同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八／同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／同 両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同 芝神明前 和泉屋吉兵衛／大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛／同 心齋橋通安土町 河内屋和助／同 心齋橋通博労町 河内屋茂兵衛／同 心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門／京都麩屋町通姉小路上ル 俵屋清兵衛／尾州名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎  
名古屋の書肆・永楽屋東四郎が元の版元であったが、のち三都の書肆も含めた相合版になったと思われる。

【一三八】和国諸職絵つくし并歌合 貞享二年刊 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号一八四・〇〇六五」

本書は前掲の『江戸職人歌合』に先立つ、江戸前期に成立した近世職人歌合（「職人尽」）のひとつ。別名『職人絵尽』『諸職多ほんかがみ』とも。貞享二年刊。上中下巻一冊。作者未詳。絵師は菱川師宣。左右四三番。職種は八三種。ただし、本書には落丁・乱丁が多くみられ、職人図が多く脱落している。また刊記も脱落している。

本書の内容は先行する『七十一番職人歌合』の強い影響下にあり、うち四十三番を採り、掲載された職人やその画中詞も同じである。原拠となったのは、明暦三年版本と思われる。ただし、本書は菱川師宣が当世風の挿絵を入れたことによって、新しい作品として出版された。歌合のおもしろさよりも、見て楽しむ絵本として享受されたことが想像できる。そのため、每半葉が上下二段に分けられ、下部が挿絵、上部に和歌と判詞がいられているが、圧倒的に絵のほうに比重が大きい。（上段・縦四・八糎、下段・

縦一六・八糎）

各巻冒頭には絵馬を模した扉。さらにそのあと、見開きで山水画風の景観図が入る。半葉毎に職人図。ちょうど中巻にあたる部分がまるごと約三〇図脱落している。一七ウは半葉のみ欠けており、修復の際に白紙で補つてある。扉絵の位置からして、もとは三冊本であったか。本書には他に四冊本（上一・上二・下一・下二）もあるが、一冊に合綴されたものが多い。板心に手が加えられており、初版ではないことがわかる。「烏帽子折」が二図あるのは、『七十一番職人歌合』の「冠師」を誤ったもの。

題簽も下部が欠けているが、元題簽と思われる、角書に「菱川」と出してあり、菱川師宣人気に当て込んだ出版であったことが想像される。

なお、本書は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「菱川／諸職絵つくし并歌合」 中央四周双辺刷題簽

内題・「和国諸職絵つくし并歌合」

表紙・改装香色表紙（二六・八糎×一八・四糎）

墨付丁数・三五丁

挿絵枚数・五七図

匡郭・四周単辺（二二・八糎×一五・七糎）、上段・四周双辺（四・八糎

一五・七糎）、下段・四周単辺（一六・八糎×一五・七糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・題簽に朱書で「織」を「職」に訂正してある。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は脱落しているため正確な点は不明であるが、同版本の刊記は以下の通りである。

「貞享二年巳二月吉日 絵師 菱川師宣」

【一三九】新撰大和詞 享保一四年序 二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二・〇三〇二」

本書は各務支考による俳諧書。別名に『大和詞口義』。二巻二冊。「言語之部」「文句之部」より成っている。「大和詞」は支考が創始した新文体を指す。

各務支考は、蕉門十哲のひとりに数えられる俳諧師である。美濃の生まれで、後年に育てた弟子たちは美濃派と称される。二六歳で芭蕉の弟子となり、最初の句集として『葛の松原』を著した。三〇歳のときに芭蕉の『続猿蓑』の編集に携わるが、まもなくして芭蕉は病没、その後、諸国を遍歴して芭蕉の遺吟・遺文を集めて『笈日記』を記している。生涯を通して著された句集や日記など、その作品は膨大な数にのぼる。別号も多く、東華房、西華房、獅子庵など。獅子庵は晩年に拠点とした故郷北野村に編んだ草庵の名前でもある。本書では冒頭の「再校之序」には蓮二坊の号を用いており、また続く「真名序」には東華坊、「仮名序」には「渡部ノ狂」を用いている。本文では、著者名に「東華坊」、校訂者に「渡部ノ狂」と出しており、別人物のようにしている。享保一四年に死去。本書は最晩年の出版であったようだ。

本書は扉として絵が二図入る。「三顧図」と題された南画風の挿絵。

本書は享保一四年に再校されて出版されたもの。再校は作者自身が手掛けた。橘屋治兵衛の出版目録によれば初版当時の価格は五匁だったらしい。なお本書は内務省旧蔵本。明治一三年に購入した。それ以前の旧蔵者は不明。

#### 【書誌】

外題・①「新撰大和詞 言語之部 再校 上」、②「新撰大和詞 文句之部 再校 下」（中央四周双辺刷題簽一七・九糶×三・二糶）

内題・「新撰大和詞」

表紙・改装紺色表紙（二五・五糶×一八・二糶）

墨付丁数・①四八丁、②四四丁

挿絵枚数・①二図、②なし

匣郭・四周単辺（二〇・〇糶×一五・四糶）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

#### 【刊年・刊行者】

本書の②四四ウの刊記は以下の通り。

「書林 京寺町二條／橘屋治兵衛」

陰刻で大きく「書林」と出しており、その下に版元名。刊年の記載はないうが、冒頭の「再校之序」には享保一四年の年記があるため、それからまもなく出版されたと考えられる。初版は享保六年。本書はそれに作者自身が再校して出版された。真名序には宝永八年の年記があるため、作品そのものの成立はその頃と思われる。

版元の橘屋治兵衛は、山陽堂あるいは懐玉堂と号した書肆で、本姓は野田氏。本書の刊記によれば、京の寺町通二条に店を構えていたようだが、それ以前は堺町通夷川上ルにいたこともあった。俳諧書を主とする専門的な書肆で、元禄二年版『其角十七條』や文久二年版『月の面影』の版元でもあり、特に蕉門派の出版を多く手がけており、「蕉門書林」とも称される。

特に本書のような支考の著作・追善集には、刊記として「蕉門書林」を用いた例が多い。蕉門と関わりの深かった井筒屋庄兵衛の手代から身を起こしたといわれている。早くて寛永年間から慶応年間にかけて、近世期を通

して活動していたとみられる。

【一四〇】芭蕉翁終焉記 明治一九年刊 一冊

旧蔵者不明 「請求番号一五八・〇三八九」

本書は蕉門の第一の弟子といわれた宝井其角がまとめた松尾芭蕉の伝記。

芭蕉の死去に伴って出版された追善集『枯尾華』に収録された追悼文で、芭蕉の生涯を折々の句を引きつづまとめたもの。元禄七年に出版されたが、本書は明治になって再刻された。一冊。別名に『芭蕉終焉記』。

作者は宝井其角。別号に螺舎、狂雷堂、晋子、宝普斎など。蕉門十哲の第一の門弟と称され、芭蕉の諸国遍歴の折は江戸に残って宗匠として活動、その門人は多く、江戸座を形成するに至る。自身も上方へ旅に出ており、大坂で没した芭蕉の最期を看取った。木曾義仲を敬愛していた師を、義仲寺に葬ったのもこの其角である。これを受けて其角は蕉門の門弟たちで追善集『枯尾華』を上梓した。その際に寄せるために記された追悼文が本書の「芭蕉翁終焉記」に当たる部分で、元禄七年に刊行された。其角の芭蕉観・俳諧観を伺える貴重な資料である。

其角は好みみの師や他の門人たちに対して、派手好きで伊達好み、酒をこよなく愛したといわれる。作風も大げさな修辞が多く、批判の対象ともなったが、芭蕉はその修辞に長けた作風を藤原定家に例えたという。口語を用いた作風は洒落風とされ、江戸の宗匠では圧倒的な人気だった。江戸詰めの武士や町人がその門人の中心であったといわれている。本書の元奥書によれば、義仲寺で本書を記したとあるが、実際は京を出たあたりの滞在先での筆と思われる。

俳文としての「終焉記」には先行の作として、「宗祇終焉記」や「貞徳終焉記」などがあり、芭蕉が宗祇を敬愛していたこともあり、これらの作を参考に本書は記されたようである。そのため、芭蕉の伝記資料としては正確ではない記事も多い。

本書は跋文によれば、松尾芭蕉の二百年忌を迎えるにあたり明治一九年に再刻されたもの。跋文は幸島桂花。桂花は幕末から明治にかけて活動した俳人。

本書の体裁は近代以前の和装本である。一ウに扉絵として、芭蕉の肖像が添えられている。芭蕉の存命中に門人の杉山杉風が書写したものを、のち模写したものとある。一オの扉には「芭蕉翁桃青居士／終焉記／江州粟津義仲寺」とある。

表紙・裏表紙ともに芭蕉の葉が刷られている。

なお、本書の旧蔵者は不明。

【書誌】

外題・「芭蕉翁終焉記 全」左肩四周双边刷題簽（一四・八×三・〇糎）

内題・「芭蕉翁終焉記」

表紙・原裝香色布目型押芭蕉（刷）表紙（二二・八糎×一五・五糎）

墨付丁数・二〇丁

挿絵枚数・一図

匡郭・四周单边（一八・五糎×一二・五糎）

印記・「日本政府図書」

備考・二〇オに朱印「定価式拾銭」

【刊年・刊行者】

本書の二〇オ記載の刊記は以下の通り。

「明治十九年八月廿四日御届／同年九月十日出版／（定価式拾銭）／翻刻

兼出版人 日本橋区萬町九番地 東京府平民 石川千代／発売所 同区同町同番地 春雲堂

出版元は明治期の俳書を出版していた春雲堂石川千代。

本書は明治一九年で、跋文によれば芭蕉の百回忌を前に出版したということである。芭蕉の百回忌は明治二六年。

【一四一】「芭蕉翁絵詞伝」 寛政五年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号一五八・〇四〇五」

本書は、蝶夢の手による芭蕉の一代記。もとは狩野正栄が絵を施して義仲寺に奉納した絵巻であったが、芭蕉の百回忌に際してそれを縮写して京の橘屋が刊行した。三巻三冊。芭蕉の「漂泊の俳聖」という後世のイメージはこの伝記に基づくところが大きい。

作者の蝶夢は浄土宗の僧で俳人。荒廃していた義仲寺を再建した人物で、生涯を通して蕉風俳諧の再興に尽力した。各地の芭蕉塚建立を援助し、地方の俳人たちの義仲寺参拝を促すことで、芭蕉を「聖」としてみなす向きを全国に広めた。また安永三年には『芭蕉翁発句集』『芭蕉翁文集』『芭蕉翁俳諧集』を上梓。これらは初めて芭蕉の全著作を網羅集成したものであり、他にも多くの俳書を刊行。その著作は数多く、大半が京の橘屋治兵衛の手によって出版された。蕉門の俳人の真蹟や俳書を全国から収集し、義仲寺内に粟津文庫を創設したのも、蝶夢の大きな功績の一つである。別号に五升庵。法名は幻阿弥陀仏。寛政七年に六四歳で没した。

義仲寺に奉納された絵巻には、三三図の絵があり、それらは狩野正栄の手によるもの。来歴は未詳であるが、寛政から文化頃を中心に活動した絵

師で、法橋に叙せられている。本書の挿絵はこの狩野正栄の手によるものを、吉田偃武が縮写したもの。吉田偃武は京都の絵師で、市川君圭、岸駒を師とした。蕉門とは関わりが深く、杉山杉風の手による「芭蕉翁之像画」も模写している。

本書は元の絵巻と同じ挿絵を載せているが、すべて見開きになっている。版本にやや磨滅がみられ、判別しにくい丁もある。特に第三冊目は右下に水損があり、にじみが多くみられる。ただし、丁付は版心ではなく、のどに刷られているため、比較的判別しやすい。

なお本書は内務省の旧蔵で、明治一五年に購入された。

【書誌】

外題・「芭蕉翁絵詞伝 上（下）」中央萌黄色題簽（二〇・六糎×四・六糎）

内題・なし

表紙・改装黄檗色表紙（三二・〇糎×二二・〇糎）

墨付丁数・①二五丁、②三〇丁、③三一丁

挿絵枚数・①一八図、②二六図、③二二図

匡郭・四周单边（二〇・八糎×一六・二糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十五年購求」「日本政府図書」

備考・①一才、③裏見返しに不明印記あり。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は以下の通り。

「寛政五年癸丑歳四月／湖南葉二井口保孝応需書／蕉門俳諧書林 井筒屋庄兵衛／橘屋治兵衛」

本書の出版は寛政五年で、芭蕉の百回忌に合わせて出版された。この前年の九九回忌に合わせて絵巻が義仲寺に奉納され、翌年の百回忌に整版本

として新刻した。

版元は井筒屋庄兵衛と橋屋治兵衛。刊記に「蕉門俳諧書林」とあるように、共に蕉門の俳書の版元で、特に橋屋は蝶夢の著作のほとんどを手掛けている。共に京寺町二条の書肆である。

【一四二】白雄先生伝 安政六年写 一冊

堀直格旧蔵 「請求番号一五八・〇四八〇」

本書は俳人加舎白雄の伝記である。外題では『白雄葛三像伝』。葛三は白雄の門人である倉田葛三のこと。作者未詳。一冊。安政六年の書写。挿絵は手彩色。

白雄は、与謝蕪村らと共に天明中興の五傑とも称される、江戸中期の俳人で、自然・無私・無技巧などを提唱した。もとは鳥酔門の鳥明に師事していたが、鳥酔七回忌法要で不遜があったとして糾弾され、江戸を去り、これをきっかけに甲信地方を遍歴した。やがて江戸に戻り、日本橋に春秋庵を開く。優秀な門人を多く輩出し、のちの化政期の俳壇を形成するに至った。前掲『芭蕉翁絵詞伝』の作者である蝶夢とも親交があった。北越、近畿、伊勢、熊野、奥羽、甲信などを旅し、それぞれ「南紀紀行」「東道紀行」「奥羽紀行」「甲峽紀行」を草している。寛政三年に五四歳で没。（一説には五七歳。）

葛三は白雄の門人で、白雄の没後、江戸日本橋の春秋庵を継ぎ、途絶していた一門の年刊撰集『春秋稿』を復活させ、白雄系の俳諧を広く流布させた。その誠実な人柄から周囲には「近日西行」と称されている。白雄の門人でも大きな功績を遺した俳人のひとり。

本書はそれぞれ「白雄先生伝」「葛三先生伝」と題して文章が寄せられている。「白雄先生伝」「葛三先生伝」それぞれの扉として、手彩色の肖像が載る。白雄・葛三それぞれの肖像とみられる。高さ二七・〇糎の紙に対して字高一八・〇糎、每半葉四行で、余裕を持たせた書写である。なお、本書の旧蔵者は信濃須坂藩主・堀直格。一才右下にその蔵書印「堀氏文庫」が見える。詳しい来歴は不明であるが、浅草文庫時代に堀家から入ったと考えられている。

【書誌】

外題・「白雄葛三像伝 完」左肩朱色料紙四周双边刷題簽に墨書（一八・

〇糎×三・五糎）

内題・「白雄先生伝」「葛三先生伝」

表紙・改装黄檗色表紙（二七・〇糎×一八・八糎）

墨付丁数・七丁

挿絵枚数・二図

匡郭・なし

字高・一八・〇糎

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「堀氏文庫」

【写年・書写者】

本書末尾（七才）の奥書は以下の通り。

「右一冊以某氏所蔵本書写畢／于時安政六乙未年秋八月（署名）」

【一四三】俳家奇人談 文化一三年・天保三年刊 六冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇一・〇三二一」

本書は文化一三年に出版された『俳家奇人談』三巻三冊と、天保三年に出版された『続俳家奇人談』三巻三冊を取り合わせた六冊本。古今の俳人の伝記を連ねた俳諧伝記。『近世畸人伝』の影響下に作られたもの。作者は俳人で洒落本作者でもある竹窓。編集は青青。挿絵は北尾政美。

正統ともに古今の俳人六〇余人を挙げ、肖像・筆跡・挿絵を示す。扱われた俳人は宗祇から建部綾足まで、おおむね時代順に配列されるが、遊女など現代では名を残さなかった人々も採用されている。続編は時代的にこれに続く内容となっていて、採られた俳人は宗長から蓼太まで六〇余人。各巻に約二〇人ずつ配置するなど、体裁は正編に倣う。正統あわせて一五二人の逸話と代表句が網羅されている。

正編の作者は竹窓。本書での名義は竹内玄玄一。有無軒とも。播磨高野の人で、のち江戸京橋西鍛冶町に住んだ。はじめは播磨の吉田白馬に師事、江戸に出てからは越谷吾山に学んだ。句当に進む。安永年間には洒落本である『咲分論』を書いている。(このときは竹窓名義。)文化元年に六三歳で没。

正統ともに編集に当たったのは、この竹窓の息子で同じく俳人であった青青である。蓬盧青青山人とも。盲目の竹窓の代筆をして本書を為した。生没年は定かではないが、続編執筆のために父の遺稿を整理している途中で没したといわれている。

挿絵は北尾政美。本書では蕙斎紹真。北尾重政の門人で、黄表紙の挿絵を多く手がけた絵師で、関わった作品は他の絵本などと合わせると二〇〇作品以上にものぼる。「略画式」を考案して、葛飾北斎ら他の絵師に大きな影響を与えたことで知られる。寛政六年には津山藩御用絵師となった。蕙斎紹真の名前はこのときのもの。本書の出版された文化年間には、松平定信の求めで「近世職人尽絵詞」(東京国立博物館所蔵)を描いており、活動

の最盛期にあたる。

挿絵は政美が得意とした風景画なども多く載るが、それに併せて俳人の肖像や俳画の模写、短冊の写し、落款・署名など、様々なものを載せる。続編の上巻(本書では第四冊目)の冒頭は、与謝蕪村による蕉門十哲の肖像画。この十葉だけ多色刷りである。ただし擬作。

なお、本書の旧蔵者は不明。墨印で「神田／本祐」とあるのは、貸本屋のものか。

#### 【書誌】

外題・①②③「俳家奇人談 上(下)」左肩四周双边刷題簽(一八・二  
糰×三・八糰)④⑤⑥「続俳家奇人談 上(下)」左肩四周双边刷題簽(一  
八・二糰×三・二糰)

内題・「俳家奇人談」

表紙・改装横刷毛目表紙(二五・五糰×一八・〇糰)

墨付丁数・①三八丁、②三五丁、③三五丁、④二六丁、⑤一四丁、⑥二

四丁

挿絵枚数・①一〇図、②一一図、③一二図、④一三図、⑤二図、⑥六図

匡郭・四周单边(二二・二糰×一五・五糰)

印記・「日本政府図書」「神田／本祐」

備考・題簽角書に「時代模画」とある。⑥改装砥粉色布目型押表紙

#### 【刊年・刊行者】

本書には刊記がないが、見返しに刊年が出ている。

①「蓬盧青青山人著／蕙斎紹真臨図／時代模画俳家奇人談／文化十三年丙子秋／彫刻出来」④「天保壬辰秋鐫／蓬盧青青山人著／八条園蓼松老人補校／続俳家奇人談」

正編の出版は文化一三年、続編の出版は天保三年。本書の正編末尾③三

五ウにはすでに続編の広告が予告として掲載してある。

初版の版元は江戸の大坂屋源兵衛であったが、本書の場合にはつきりしない。

【一四四】藻塩袋 宝暦四年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇二一・〇二二七」

本書は菊岡沾涼による俳論で、本書は求版本。蕉門俳人・江戸座の俳人の発句を中心に、詳細な注釈を施したもの。和漢の様々な典籍から引用しており、もとの解釈から大きく逸脱するものも多いが、網羅的な引用文献資料が本書の主眼であったとされる。五巻五冊。

作者は菊岡沾涼。米山翁沾涼とも。伊賀上野の生まれで、のち江戸神田で葉屋を生業とした。最初は一品の門下に入り、南仙と号した。そののち露沾のもとへ入って沾涼と号するようになり、点者となる。本書の他に『綾錦』『鳥山彦』など多くの俳書を記したが、その他にも『本朝世事談綺』『諸国里人談』『日本道中行程記』『奈良土産』『江戸砂子』など、様々な分野に渡って多くの編著を残した。『百福寿』はそのうち絵入俳書の流行のきっかけを作った著作である。延享四年に六八歳で没した。

絵師は未詳。本書の挿絵は、注釈として機能する地図、暦、絵図などが中心で、これら図版も先行する資料からの引用である。本書は図版資料集としての側面も持つといえる。本書の場合、見返しが脱落しているが、元の版には「神儒伝医」「詩歌文章」「故事物類」「物語雑談」と出しており、本書の網羅性がわかる。ただし、本書表紙には昌平坂学問所の蔵書表「和歌雑詠」が貼付されており、俳書として分類されている。また「文久癸亥」

の朱印があることから、文久三年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・「藻塩袋 一（五）」左肩四周双边刷題簽（一七・〇糶×三・三糶）

内題・「藻塩袋」

表紙・改装紺色表紙（二二・五糶×一五・五糶）

墨付丁数・①二六丁、②二五丁、③二六丁、④二八丁、⑤三二丁

挿絵枚数・①三図、②二図、③二図、④二図、⑤三図

匡郭・左右双边（一七・三糶×一二・五糶）

印記・「番外書冊」（表紙・墨印）、「和歌雑詠」（表紙・紙片）、「日本政府図書」、「浅草文庫」、「昌平坂」、「墨印」、「文久癸亥」、「不明朱印（一・〇糶×〇・五糶）」

【刊年・刊行者】

本書二九ウの刊記は以下の通り。

「宝暦四年甲戌九月求版／大坂心齋橋南四丁目 吉文字屋市兵衛／江戸日本橋通三丁目 同 次郎兵衛」

本書は宝暦四年に吉文字屋から刊行された。ただし、本書は記載のとおり求版で、元の版は、寛保三年に江戸の若菜屋小兵衛から出版されている。また、文政五年には改題本として『発句注解俳諧故事談』として出版された。

版元の吉文字屋市兵衛は堂号を定栄堂、本姓を鳥飼氏とする大坂でも大手の書肆である。寛永年間から明治にいたるまで近世を通して活動した。出版目録は本書と同じ宝暦四年に出版された『花月僊』に載る。また、江戸の吉文字屋次郎兵衛は、春秋堂と号した書肆で、本書の三〇オ〜三三オ

にかけて載る「春秋堂蔵版目録」は、この江戸の吉文字屋次郎兵衛の蔵版目録である。脱落する前には、見返しにも「春秋堂」と出しており、本書の出版を主導したのはこの江戸の吉文字屋のほうであると思われる。

【一四五】新撰俳諧明治歳時記葉草 明治一五年刊 三冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇二一・〇二八三」

本書は三森幹雄による俳諧の季語を集めた歳時記。横型。三巻三冊。

俳諧における季語や年中行事を分類整理し、注釈をつけたものでは、滝沢馬琴の『俳諧歳時記』がその巨頭で、明治に至るまで繰り返し増補再版され続けていた。「葉草」の題は、この『俳諧歳時記』に増補を加えた嘉永四年版『増補俳諧歳時記葉草』にちなむ。ただし、本書の内容そのものは延享二年版『俳諧手挑灯』に手を加えたものである。

本書の作者は俳人の幹雄。三森幹雄とも。号に香楠居、春秋庵など。磐城石川の人で、志倉西馬の門人。多くの文人たちと交流した明治期俳壇の中心人物で、正岡子規と議論を戦わせたことでも知られる。明治政府が俳諧を大衆教化の文化振興策を政策として提唱した際、それに賛同して試験を受けて教導職となった。教導制度が廃止されると、講社を神道組織として再編して、俳諧による大衆教化運動に専念した。これらの行動が子規の攻撃対象となり、旧体制の象徴のような人物として捉えられた。しかし、当時の俳壇の巨匠としての人気は高く、門人も数多い。

本書の場合、扉には松尾芭蕉の肖像が掲載されている。多色刷り。俳聖としての神格化がみてとれる。幹雄が芭蕉を賛美し、「正風俳諧」を標榜したことのある。また、見返しも黄色料紙に、匡郭を芭蕉の葉で描

いていて、蕉門俳諧を意識した趣向。原装・原題簽。

なお、本書の旧蔵者は不明。明治一五年の出版と同時に納められたか。

【書誌】

外題・三森幹雄著／新撰／俳諧／明治歳時記葉草 上（下）左肩四

周単辺刷題簽（八・三糎×二・三糎）

内題・「新撰俳諧明治歳時記葉草」

表紙・原装朱色唐草文様艶出表紙（二六・六糎×一一・八糎）

墨付丁数・①四六丁、②六〇丁、③四三丁

挿絵枚数・①一図

匡郭・四周単辺（九・〇糎×一三・〇糎）

印記・「日本政府図書」

備考・外題角書に「新撰俳諧」とある。刊記に「定価七拾五錢」の朱印。

【刊年・刊行者】

本書末尾③四三才の刊記は以下の通り。

「明治十四年十月十八日版權免許／同十五年三月刻成／著者 東京府平民

三森幹雄 日本橋蛸壳町二丁目四番地／出版人 東京府平民 須原鉄二

日本橋区西河岸町十二番地／発兌書林／東京 稲田佐兵衛／同 山中市兵

衛／同 小林喜右衛門／同 高木和助／同 旭昇堂／大坂 前川善兵衛」

本書の出版は須原鉄二となっているが、もとの江戸の大書肆須原屋のことである。堂号に畏三堂。幕末から明治にかけて活動した。

発兌書林として載る本屋も、ほとんどが近世期から活動する書肆である。

序文の年記は明治十三年。翌明治十四年に出版権の許可が下り、さらに

翌十五年に刊行された。

【一四六】我春集 明治一一年刊 一冊

太政官記録局旧蔵 「請求番号二〇二一・〇二七二」

本書は嘉永五年に出版された小林一茶の句集『おらが春』を、明治一一年に再版した第三版。本書の見返しに内題として『我春集』と出しているが、『我春集』は『おらが春』に先行する一茶の別の句集であつて、本書とは別のもの。『おらが春』という書名は、信州中野の白井一之が巻頭の句「目出度さもちう位もおらが春」から付けた。一卷一冊。

『おらが春』は文政二年の一年間における発句・連句に、随筆をあわせた句文集で、最初から出版を念頭に入れた状態で記されたと考えられている。愛娘のさとを瘡瘡で亡くし、その追悼の思いが本書を記すきっかけになったもので、晩年の一茶の代表作とされる。

一茶はもとは葛飾派に学び、俗談調の影響を受けた。そのち談林なども撰取るが、一茶の最大の特徴は、田舎の牧歌的な題材、卑俗な発想、風刺的な傾向などで、川柳と共通する点も多いが、俳諧の原点である宗鑑の俳諧性に立ち返つたものと評価される。その生涯は、継母との反目、妻子の早世など、決して幸福なものではなく、俳人としての名声からも縁遠いものだった。しかし、それでも当時の一茶の作風に同調する者は多かったといわれている。一茶の評価が高まるのは、明治末期の自然主義文学の流行がきっかけであった。また、大正末期から昭和初期にかけてのプロレタリア文学の隆盛期には、再評価が進みブームを巻き起こすまでとなった。明治一一年に刊行された本書は、その一茶の再評価に先立つものである。本書は一茶没後二五年目に、白井一之が自筆稿本を写して出版した嘉永五年版がもとになっている。筆跡も一茶の写しであるが、挿絵も精密に写された。一茶特有のほのぼのとした俳画が多く挿入されている。体裁は袋

綴で、近世以前の和装本に同じ。折込の料紙だけ酸性紙か。

見返しは紅色料紙で「俳諧寺一茶翁著並図／我春集／信陽有明庵蔵梓」と出している。「有明庵」は白井一之の堂号。

なお、本書は太政官記録局の旧蔵。出版の際に新収されたか。

【書誌】

外題・「おらが春 全」左肩四周双边刷題簽（二五・〇糎×三・〇糎）  
内題・「我春集」

表紙・原裝黄檗色雷文繫艶出表紙（二三・〇糎×一五・五糎）

墨付丁数・四四丁

挿絵枚数・九図（うち一図は折込）

匡郭・四周单边（一七・三糎×一三・五糎）

印記・「太政官記録印」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書末尾四四才記載の刊記は以下の通り。

「明治十年十一月御届／明治十一年第六月出版／出版人／長野県平民白井彦兵衛／俳名 有明庵一之／第拾九大区五小区高井郡／中埜町三十三番地／発売書林 西沢喜太郎／第二十三大区三小区水内郡／長野町八百十五番地／中村利貞／第二十六大区六小区水内郡／柏原村七十二番地／売捌所 山岸清左衛門／第十九大区五小区高井郡／中埜町二百八十二番地／白井亮／第十九大区五小区高井郡／中埜町三十三番地」

嘉永五年の段階では、白井一之の自費出版であつたようだが、嘉永七年に第二版として『一茶翁俳諧文集』と題を改めて江戸神田の須原屋源助から出版された。現在もっとも多く流布しているのは、東京神田の好文堂から明治一一年に出版された第三版である。ただし、本書の場合は刊年こそ同じだがそれと版元を別にする。前後関係は不明。

【一四七】風俗文選拾遺 延享元年序 二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二・一〇三〇二」

本書は延享元年に出版された北華（山崎相如）による俳文『風俗文集 昔の反古』の改題本。二巻二冊。その後隆盛期を迎える狂文集の先駆けとなった。自伝などに託して心情を述べたものだが、滑稽な狂想的な表現が中心となる。

北華は、江戸中期に活動した俳人で戯作者。山崎相如とも。自墮落先生の戯作名で知られる。風狂の人であった。元禄十三年に武士の子として生まれるが、三十代で浪人となったことをきっかけに江戸に隠棲、戯作者として知られるようになる。元文四年に何故か自らを死んだことにして日暮里の養福寺に墓を建てて、以降の著作を自墮落先生の遺文として出版し続けた。そのころの自分を「後の北華」と称していたが、結局『勞四狂』の跋文に追悼文を書かせて「後の北華」も死んだことにしたようで、実際の没年はよくわからない。馬琴ら後世の戯作者たちはこぞって狂文戯作の祖を、自墮落先生から平賀源内の流れにあると評している。

本書も作者存命中に出版されたものだが、一応死んだことになっている。挿絵にもこの自墮落先生の肖像と、存命中に養福寺に建てた碑が載せられている。肖像を描いたのは作者自身で左下に「後北華写」と署名がある。思想家を想起させるような姿で描かれており、実際に面影を写していると言いはり難く、徹底して諧謔性が貫かれている。序文には「先生終焉の記」として、自分自身の追悼文まで書いている徹底ぶりである。他には主に、本文の内容に即した挿絵が入っている。

なお、本書は内務省の旧蔵である。明治一三年に購入された。

【書誌】

外題・①「風俗文選拾遺 乾」左肩四周双边刷題簽に墨書（一六・八糎×三・〇糎）、②「風俗文選拾遺 下」左肩四周双边刷題簽（一五・九糎×二・八糎）

内題・「風俗文選拾遺」

表紙・改装縹色布目型押表紙（二二・五糎×一五・七糎）

墨付丁数・①二〇丁、②二二丁

挿絵枚数・①四図、②三図

匡郭・四周单边（一八・〇糎×一四・〇糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」「日本政府図書」

備考・版木に磨滅がみられる。

【刊年・刊行者】

刊年に関しては記載がないため不明。延享元年の序文があるが、これは初版出版時に相当する。本書は改題本で後世に出版されたもの。同じ改題本では天保八年に出版されたものもある。

尾題の下に以下の通り。

「江戸下谷御成道 英文蔵梓」

英屋文蔵は青雲堂とも号した書肆で、上野寛永寺の御用を務めた書肆でもある。本書末尾には家伝薬である「登龍丸」の広告も掲載されている。天保一四年の奥書を持つ志賀理斎の『三省録』には、この広告に併せて蔵版目録も載ることから見ても、本書は天保年間の出版とみてよいと思われる。

また、本書は一二書肆との相合版である。

【一四八】和漢文操 享保一二年刊 七冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二・一〇三〇六」

本書は蕉門十哲の一人である各務支考の編集により成る俳文集である。中心となるのは支考が考案した新形式の詩文で、詩歌・文章合わせて一五七編を収録した。作者は吉田兼好から蕉門の当世俳人まで広く採っているが、多くは支考とその門人に占められる。七巻七冊。

各務支考は蕉門俳人の中でも多くの著作を持ち、本書もそのうちのひとつである。元禄三年に蕉門に入り、元禄七年には『続猿蓑』の編集に参加。芭蕉の最後の旅にも随っており、大坂で最期を看取ったという。支考の事跡としては、近世の俳壇の中核を為す美濃派を形成し、多くの地方俳人を育成したことが挙げられる。支考は生涯を通して全国を旅し、行く先々で俳論を説き、芭蕉の追善興行を行った。これにより蕉風俳諧は全国へと広まった。また、支考は本書の中で日本風の漢文体を用いた新詩文を提唱している。さらに新しい試みとして仮名詩を多く収録した。前者は継承されることなく試みのまま終わったが、後者はのちの俳体詩の発展に大きな影響をおよぼしたと指摘されている。

本書には扉絵が入り、「獅子庵遺稿」と載る。「獅子庵」は支考の号のひとつ。本書の出版時に支考はまだ存命で、これは正徳元年に伴死したことを受けての表現。支考が実際に没したのは享保一六年である。

なお、本書は内務省の旧蔵で、明治一二年に購入したものである。

【書誌】

外題・①「和漢文操 序 凡例 目録 賦類 一」②「和漢文操 詩類 歌類／辞類 二」③「和漢文操 行類 聯類 序類 三」④「和漢文操 奏

表類 教令類 書状類 四⑤「和漢文操 賛類 頌類 弁類 説類 五」  
⑥「和漢文操 論類 解類 箴類 六」⑦「和漢文操 銘類 伝類 吊条類 七」左肩四周双边刷題簽（一九・〇糎×四・〇糎）

内題・「和漢文操」

表紙・改装紺色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

墨付丁数・①五〇丁、②四一丁、③四三丁、④三五四丁、⑤三六丁、⑥三四丁、⑦五五丁

挿絵枚数・①二図

匡郭・四周单边（二〇・四糎×一五・〇糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」「日本政府図書」

備考・⑦五五オ・ウに「俳書目録」「俳集目録」の記載。①～⑦題簽に見出し。

【刊年・刊行者】

本書⑦五四ウに次のような記載がある。

「享保十二丁未秋九月如意珠曰」「書林 洛陽寺町押小路／橘屋治兵衛梓行」

本書序文には享保八年の年記が見えることから、そのころには成立していたと考えられ、享保一二年に橘屋治兵衛により上梓された。本書末尾に掲載されている「俳書目録」「俳集目録」はすべて支考の著作で、これらの出版はすべて橘屋治兵衛の手によるもの。橘屋治兵衛は「蕉門書林」と称した書肆で、蕉門の俳書の出版を多く手掛けている。

【一四九】卜養狂歌集 刊年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇二・一〇二九二二

本書は狂歌作者で俳人でもあった半井卜養の狂歌を、春夏秋冬雑歌に分類した狂歌集。本来は二巻二冊だったものを、本書は合冊して一冊にしてある。

『卜養狂歌集』には諸本あり、卜養自らまとめた写本数種とそれを元にした版本数種、別系統の絵巻物数種、百回忌法要に出版された版本などを挙げるができる。本書はそのうちの卜養の写本をもとにした版本である。狂歌約二二〇首、発句五句を収める。狂歌の前書きには長い逸話が伴い、狂歌咄集としての性格も併せ持っていて、この逸話の内容にあわせて挿絵が入れられている。

半井卜養は松永貞徳に俳諧を学び、二七歳で『犬子集』に入集、若くして堺俳壇の中心的存在となった。のち江戸城に召されて幕医となり、栄進を果たす。同時に江戸俳壇でも活躍し、貞門の五俳哲に数えられた。またさらに多くの狂歌を作り、諸大名とも交遊、即興で才を発揮したといわれている。そのため歌風は落首風と評価され、洒落、俗語を用いた通俗的なものであった。しかしその即興性に特化した歌風は諸大名からは人気が高く、そんな中で『卜養狂歌集』は貴人たちの求めによって編集されたもので、初期の段階から絵を伴っていた。寛文六年に製作された絵巻は、狩野季信の手によるものである。延宝六年に七二歳で没。

本書の初版は松会版の大本二冊で、本書はその覆刻版。絵師の署名はないが同一である。毎半葉一五行。本書の状態はあまりよくなく、袋綴じの袋が開いてしまっている個所がある。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙右肩に「番外書冊」の墨印がある。

#### 【書誌】

外題・「半井卜養狂歌集 全」左肩無地料紙題簽に墨書（一八・四糎×三・四糎）

内題・「卜養狂歌集」

表紙・改装朱色唐花亀甲繫地蓑亀空押表紙（二五・八糎×一八・〇糎）

墨付丁数・三六丁

挿絵枚数・二一図

匡郭・四周単辺（二二・七糎×一六・〇糎）

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「番外書冊」（表紙右肩に墨印）

#### 【刊年・刊行者】

本書の刊記の記載は、三六ウ末尾にある「柏屋与一」の記載のみ。正確な刊年は不明である。『卜養狂歌集』には、刊年不明の柏屋版が二種ある。柏屋与一は江戸小伝馬町三丁目に店を構えていた書肆。

#### 【一五〇】狂歌現在奇人譚 文政七年序刊 四冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号二〇二・〇二九〇」

本書は八島定岡による狂歌集で、当代の狂歌師の逸話を集めてその一話ごとに狂歌師の肖像を添えたもの。初編・後編・三編各二冊に、「歌之部」を一冊あわせて三編七冊だが、当文庫に所蔵されているのは後編・三編各上下二冊で、計四冊である。作画ともに定岡。

全七編に採られた狂歌師は八四名。狂歌は六四四首。載せられた逸話は儒教的倫理観を強く反映しており、上品な分諧諷性はない。初編の例言に曰く「きよらにおもしろき人」を選び、品評したという。三編の例言によれば「実説」であることを主張しており、作者本人が直接見聞きしたこと

に拠ると思われる。創作と考えられる逸話も少なくはないが、馬琴伝においては、馬琴に直接取材したものと指摘もあり、事実二人には交遊があったようである。

作者の八島定岡は、岳亭丘山の名でも知られる。狂歌師であると同時に戯作者で、さらに絵師でもあった。『南総里見八犬伝』に並ぶ読本の大作『俊傑神稲水滸伝』の作者でもある。もとは高貴な生まれというが詳細は不明。画を能くし、両親の死後に画業に専念した。魚屋北溪、葛飾北斎に学んでいる。狂歌は石川雅望を師とする。文化年間に洒落本や合巻を出しているがあまり評判にはならなかったとみえ、文政年間に大坂へと移ってから『俊傑神稲水滸伝』などの作品に恵まれて馬琴に次ぐ活躍をした。生涯を通じた著作は数えきれないほどである。天保一四年版『海川夜話仙家月』が筆名のみえる最後の作品だが、その後いつ没したのかなど不明な点も多い。本書が出版されたのは、作者が大坂に移ってまもなくのころで、狂歌師と絵師を兼業しながら雑書を出版していた。本書はそういったもののひとつ。似たスタイルの著書に『狂歌百人一首』などがある。

本書は毎半葉一〇行で、匡郭はない。字高一九・〇糎。挿絵の匡郭は四周单边（一九・〇糎×一三・三糎）で、すべて狂歌師の肖像であり、なおかつその逸話の一場面を描いたものである。また、本文中に、短冊や掛け軸を写した絵が挿入されている場合もある。

また、本書の浅草文庫以前の旧蔵者は不明。②一才右下・④二四ウ刊記下に花押のようなものがあるが、詳細は不明である。

#### 【書誌】

外題・①「画入／狂歌現在奇人譚 二編 上」②「狂歌現在奇人譚 二編 下」③「画入／狂歌現在奇人譚 三編 上」④「狂歌現在奇人譚 三編 下」左肩墨書打付

内題・「狂歌現在奇人譚」

表紙・改装縹色雲母引表紙（二五・七糎×一七・八糎）

墨付丁数・①二九丁、②二八丁、③三〇丁、④二四丁

挿絵枚数・①八図、②七図、③九図、④九図

匡郭・なし（挿絵匡郭・四周单边一九・〇糎×一三・三糎）

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

#### 【刊年・刊行者】

本書の序文の年記は文政七年になっており、成立はこのころとみて間違いないが、本書の刊記には刊行年の記載がないため、正確な時期は不明。

後編下に相当する第二冊の末尾（②二八ウ）には以下の通り載る。

「東都書房 日本橋通一丁目 大坂屋茂吉」

大坂屋茂吉は文魁堂と号した江戸日本橋の書肆で、読本・人情本・滑稽本などの戯作の出版を多く手掛けている。

三編下に当たる第四冊の末尾（④二四ウ）では次の通り。

「狂歌現在奇人譚 初編／二編／三編／筆者 黙齋三考／彫刻 野瀬保治／東都書房 日本橋通一丁目 大坂屋茂吉」

なお、この刊記の横には墨書で、

「慶應四戊辰年六月吉日（花押）」とある。

旧蔵者が本書を手に入れたときの落書か、あるいは再版の際に書かれたものと考えられるが不明。

【一五一】狂歌烟草百首 弘化三年跋刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇一・〇四〇二二

本書は、狂歌師で、煙草屋の主人でもあった蘭麝亭薫が記した、主題を煙草に特化した狂歌集である。百首の狂歌と煙草にまつわる知識を掲載し、煙草の百科事典ともいえる。一冊。

蘭麝亭薫は、江戸飯田町中坂下堀留に住んだ煙草屋の主人で、本名を三河屋弥兵衛次という。別号に奇南楼、橘香保留など。もとは牛込揚場の三河屋の番頭であったが、このころから狂歌をたしなみ、三陀羅法師の社中に属した。のち大田南畝に入門して教えを受ける。洒落本・合巻も出版したが、平凡な内容で、文化文政の時期に現れた典型的な素人作者のひとりであった。文政七年に五六歳で没した。本書はその没後二三年目の弘化三年に遺稿をまとめて出版された。大田南畝が序文を寄せている。

本書の体裁は上下二段に分けられており、上段（七・〇糎×一四・〇糎）には日本全国の煙草の名産地とその効能、下段（一三・〇糎×一四・〇糎）には狂歌百首と、古今東西の喫煙道具や煙草製造図などを絵入りで載せる。当時の長崎から入ってきたと思われるオランダのパイプや、東南アジアの喫煙習慣など、詳細な絵が添えられており、煙草にまつわる狂歌集というよりも、煙草の百科事典として網羅的な資料を載せた点が評価される。

なお、本書は内務省の旧蔵である。明治十二年に購入し、のち十四年に成立した農商務省に移管された。煙草栽培の資料として扱われたものと思われる。

なお、本書には内務省が購入する以前の旧蔵者のものと思われる長方陰刻朱印「望己樹奈倍志未文庫」がある。詳細は不明。早稲田大学図書館が所蔵する『鴉鷺記』に同型の朱印が押されている。

#### 【書誌】

外題・「烟草百首 全」左肩四周双边刷題簽（二五・〇糎×三・五糎）  
内題・「狂歌烟草百首」

表紙・改装香色表紙（二五・八糎×一七・五糎）

墨付丁数・三九丁

挿絵枚数・二一図

匡郭・四周单边（二〇・〇糎×一四・〇糎）

印記・「大日本帝国図書館」「明治十二年購求」「農商務省図書」「太政官文庫」「望己樹奈倍志未文庫」

#### 【刊年・刊行者】

本書に刊記の記載はなく、正確な刊年は不明だが、跋文の年記が弘化三年となっており、このころの出版であると考えられる。弘化三年は作者の没後二三年目に当たる。本書三九ウには「三河屋蔵板記」とある。三河屋は作者の煙草屋の屋号であることからみて、縁者による自費出版であったと想定される。

【一五二】声曲類纂 弘化四年刊 六冊

内務省図書館旧蔵 「請求番号一九九・〇二三九」

本書は著述家であった斎藤月岑の手による本朝の音楽史・演劇史をまとめた書。古版本の模写を多く含み、殊に浄瑠璃史に関しては、現在でもなお一級の研究史である。天保一〇年成立、弘化四年刊。五卷六冊。

本書の主な考察対象は浄瑠璃と、それに付随する形での小唄と江戸長唄であり、三味線音楽史を網羅したものということもできる。古版本を模写して収録、参考文献は数百種に及ぶ。作者の考察は加えず、異同・異説もあまねく収録しているため、客観的態度が貫かれている。作者が江戸の人であるため、やや江戸の資料に偏りが見られる点を除き、優れた研究書で

あるといえる。巻数は五音の名称を採って「宮」「商」「角」「徵」「羽」と表記。「宮」のみ上下二冊。脇方簽あり。①「平家物語之事／浄瑠璃節の始原／小野通女が事／三味線の権輿」②「京師浪花諸流浄瑠璃語略伝系図」③「浪速竹本豊竹略伝／両座作者名譜／同浄瑠璃外題／三都操座浄瑠璃外題略記」④「江戸諸流浄瑠璃語略伝系図／浄瑠璃作者名譜」⑤「江戸芝居古図／同古浄瑠璃絵本模／古版本操芝居模」⑥「諸流小唄部類年代の考／江戸長唄略記／追考」

作者の斎藤月岑は、幕末から明治にかけて活動した著述家であり、江戸神田雉子町の町名主であった。一五歳のときに名主職を継ぎ、通称の市左衛門を襲名している。月岑は号で出版に際してのみ使用していたようである。漢学を日尾荊山に、国学を上田八蔵に、絵画を谷口月窓に学んでいる。

代表作である『江戸名所図会』は、祖父の幸雄、父の幸孝から引き継いだ親子三代に及ぶ大著となった。他にも『東都歳時記』『武江年表』など、多くの大著を完成させている。明治一年に七五歳で没した。

本書の絵師は長谷川雪堤。巖松齋とも。月岑が完成させた『江戸名所図会』で、実際に現地に赴き各地を描写した長谷川雪且は実父。粉本などは親子で模写したものが多く、父同様に名所絵を能くし、『相中留恩記略』などを手掛けていて、斎藤月岑とは親子二代で関わった。唐津藩御用絵師であった長谷川雪塘は弟子にあたる。明治一五年に七〇歳で没した。一部、古版本の模写は作者自身の手によるものもある。

本書の挿絵は資料としての性格が強く、ほとんどが古版本の模写である。それはたとえば、風俗資料をもとに、近世前期の操浄瑠璃の芝居小屋や舞台の様子を描いたものもあれば、古浄瑠璃正本の挿絵の写しもある。また、使用した楽器などの精巧な図版などを、多く掲載する。これらの資料は多く、石塚豊芥子からの借用であった。豊芥子はその蔵書を「芥子屋本」と

称された幕末の蔵書家である。演劇関係の蔵書は特に多く、元禄から享保年間を最後に幕末にはすでに姿を消していた古浄瑠璃正本もそのコレクションの一つであった。

なお、本書は内務省図書局の旧蔵。図書局は、明治九年に図書寮を改めて設置されたもので、明治一八年に廃止されている。本書にある「図書局文庫」の印は明治一五年に押されたものと思われる。

また、現在、当文庫には加藤直種の旧蔵の同版本も所蔵されている。（請求番号一九九・〇二三八）

#### 【書誌】

外題・①「声曲類纂 宮上」、②「声曲類纂 宮下」、③「声曲類纂 商」、

④「声曲類纂 角」、⑤「声曲類纂 徵」、⑥「声曲類纂 羽」左肩朱色料紙四周双边刷題簽（一八・五糎×三・〇糎）

内題・「声曲類纂」

表紙・原裝砥粉色流水型押松葉文様（色刷）表紙（二六・〇糎×一七・

〇糎）

墨付丁数・①三二丁、②二六丁、③三二丁、④三二丁、⑤二七丁、⑥四

〇丁

挿絵枚数・①一四図、②一七図、③七図、④一五図、⑤五〇図、⑥一三

図

匡郭・四周单边（一八・三糎×一三・二糎）

印記・「図書局文庫」「日本政府図書」

備考・見返しは朱色料紙に雲母引。魁星印あり。「白雪堂月岑子編集／松齋雪堤先生画図／三都 声曲類纂／書買 千鍾堂 青藜閣（印）」

#### 【刊年・刊行者】

本書の⑥三九ウの刊記は以下の通り。

「天保乙亥季秋藁成／弘化丁未季冬発行／書舗 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／浅草萱町一丁目 須原屋伊八 合梓」

これに加え、江戸と大坂二都市の書肆の名前が「発行書林」として四〇才に記載されている。

本書は天保四年に成稿し、弘化四年に出版された。

このほかに明治二二年に増補版が出版され、これには四種ある。巻頭に多色刷で浄瑠璃人功神の肖像などが増補されている。さらに大正一二年には、月岑の遺稿を「補遺」として一冊加えた七冊本が出版された。

【一五三】声曲類纂 弘化四年刊 六冊

加藤直種旧蔵 「請求番号一九九・〇二三八」

本書は前掲本と同版本にあたるが、加藤直種の旧蔵によるもので、のち元老院に所蔵されて現在に至るものである。

前掲書は、元表紙に元題簽であったが、本書は題簽だけが後補されたものの。

また、その他の体裁も概ね同一であるが、見返しに押された魁星印が違うものになっている。また版元名の下に押された印記が、前掲書では「千鍾房」であったものが、本書では「浅草」「須原」の二つに変更されている。

これはおそらく、前掲書の場合、出版の主導が日本橋の須原屋茂兵衛であるのに対し、本書は浅草の須原屋伊八であったのだろう。

版木の磨滅の具合から見て、本書のほうがやや後の刷りか。

本書の旧蔵者、加藤直種は、江戸後期に活動した歌人・国学者で、加藤千蔭の後裔にあたる人物。蔵書家としても知られている。印記にある「芳

宜園」とは、加藤家が代々用いた号である。

【書誌】

外題・①「声曲類纂 一上」、②「声曲類纂 一下」、③「声曲類纂 一二」、

④「声曲類纂 三」、⑤「声曲類纂 四」、⑥「声曲類纂 五」左肩無地料

紙四周双边刷題簽に墨書（一四・四糎×三・五糎）

内題・「声曲類纂」

表紙・原裝砥粉色流水型押松葉文様（色刷）表紙（二六・〇糎×一七・

〇糎）

墨付丁数・①三二丁、②二六丁、③三一丁、④三二丁、⑤二七丁、⑥四

〇丁

挿絵枚数・①一四図、②一七図、③七図、④一五図、⑤五〇図、⑥一三

図

匡郭・四周单边（一八・三糎×一三・二糎）

印記・「芳宜園奇賞」「元老院図書記」「日本政府図書」

備考・見返しは朱色料紙に雲母引。魁星印あり。「白雪堂月岑子編集／松

齋雪堤先生画図／三都 声曲類纂／書買 千鍾堂 青藜閣（印）」

【刊年・刊行者】

本書の⑥三九ウの刊記は以下の通り。

「天保乙亥季秋藁成／弘化丁未季冬発行／書舗 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／浅草萱町一丁目 須原屋伊八 合梓」

これに加え、江戸と大坂二都市の書肆の名前が「発行書林」として四〇才に記載されており、前掲書と同一である。

【一五四】歌舞音楽略史 明治二十一年刊 二冊

旧蔵者不明 「請求番号一九九・一二四」

本書は明治二十一年に出版された、日本の芸能史をまとめた著作であり、本邦最初の音楽史の研究書ともいわれている。乾・坤の二巻二冊。金属活字。

それまで、日本の芸能研究は近世に記された『嬉遊笑覧』などの随筆や、諸家に伝わる系図などに基づいており、歴史的根拠の乏しい史料に頼っていた。だが、明治になってからこれらの研究手法を否定し、より科学的に検証しようという機運が高まっており、本書はそういった時代の流れの中で編まれたものである。上巻は記紀神話におけるアメノウズメによる歌舞音楽の起源に始まり、俳優、歌垣などの古代歌謡から、雅楽、催馬楽、今様など上代から中古までの芸能について書かれ、下巻は田楽に始まり、猿楽能、狂言などの中世芸能から歌舞伎、浄瑠璃などの近世芸能に至る。だが、両巻を通して特に紙面を割かれているのは雅楽についてである。起源、変遷、雅楽寮の構成など、多くの文献を引いた上で考察がなされている。

著者は小中村清矩。幕末から明治に活動した国学者・史学者。江戸の人。本居内遠に入門して学業に専念、のち和歌山藩古学館教授を経て、和学講談所講師となる。明治になってからは太政官に出仕し、内務省御用掛、修史館御用掛、東京大学教授、東京学士会院会員など要職を歴任。『古事類苑』の編纂委員長としてその完成に尽力した。貴族院議員を務めてのち、明治二十七年に七五歳で没した。

挿絵は主に図版資料である。古画の模写がほとんどだが、多くの資料を収録する。絵師は長命晏春と川邊御楯。長命晏春は明治期に活動した画家で、現在、東京国立博物館が所蔵する平家納経の模写にも参加している。

川辺御楯は狩野派、土佐派に学んだ絵師で、それと同時に平田篤胤門下の西原晃樹に学んだ国学者でもあった。幕末の混乱期にはいわゆる維新志士として、高杉晋作らと交流があったという。明治維新のち太政官に出仕、画業に専念してのちに、東宮御所や皇居の襖絵などを手掛けた。本書の体裁は近代以前の和本に同じで、袋綴だが、料紙は酸性紙で金属活字による出版である。

本書は昭和三年に岩波文庫に収録され、昭和五九年に再版されている。なお、本書の旧蔵者は不明。①一ウに「陽春廬蔵版記」と押印されているが、「陽春廬」とは、作者の号。

【書誌】

外題・「歌舞音楽略史 乾(坤)」左肩四周双边刷題簽(一五・〇糎×三・二糎)

内題・「歌舞音楽略史」

表紙・原装金茶色表紙(二二・二糎×一四・八糎)

墨付丁数・①六二丁、②五八丁

挿絵枚数・①一五図、②一四図

匡郭・四周双边(一八・〇糎×一二・二糎)

印記・「日本政府図書」「陽春廬蔵版記」

【刊年・刊行者】

②五八才に記載されている刊記は以下の通り。

「明治二十年九月三日版權免許／明治二十一年二月二十一日印刷／明治二十一年二月廿七日出版／著述者兼発行人 東京府士族 小中村清矩 東京府下北豊嶋郡金杉村三百二十五番地／発売所 吉川半七 京橋区南伝馬町一丁目十二番地／印刷所 東京金玉出版社 神田区今川小路三丁目一番地」

本書の刊行は明治二十一年。版元は吉川半七。文政天保のころまで貸本業を営んでいた近江屋嘉兵衛に、文久三年に養子入りして家業を継いだ。近江屋半七。近半とも。現在の吉川弘文館。

東京金玉出版社は明治期に活動した印刷所で、多くの著作の出版も手掛けている。本書の場合、「東京金玉出版社」と住所のあいだの行に、スタンブ印で「印刷人 田口高朗」と補ってある。

【一五五】琉球楽器図 写年不明 一冊

旧蔵者不明 「請求番号二二七・〇〇一〇」

本書は「琉球楽器図」が外題にとられているが、他にも「位階表」「明珍家系図」「井田考工解」「明朝直省郡邑」「大清風俗記」「学校建立之大意」「琉客談記」などと合冊されており、明清朝や琉球王朝についての資料集と表現するのが適切である。しかし、内容はかなり雑多であるといわざるをえない。写本。

「位階表」(一オ〜五ウ)は官位相当制に基づく律令制下の位階の一覧である。「明珍家系図」(六オ〜一三ウ)は、室町時代から江戸時代にかけて活動した甲冑師の一族として知られる明珍氏の系図である。末尾には「享保四歳次乙亥二月廿六日」の年記がある。「井田考工解」(二四オ〜三三オ)は、農地の区画整備などを中心に、度量衡などをまとめた経済の資料集である。区画割や農具の図版を一七図載せている。「明朝直省郡邑」(二四オ〜三八ウ)は明代の自治体制度をまとめた一覧である。「大清風俗記」(三九オ〜四六ウ)は清代の風俗についてまとめた文章である。このあとに「琉球楽器図」(四七オ〜五〇オ)が載る。ここには「哨呐」<sup>ソウナツ</sup>「横笛」<sup>ホンテツ</sup>「管」<sup>カン</sup>「小銅鑼」<sup>コドウラ</sup>

「鼓」<sup>コ</sup>「銅鑼両班」<sup>ドウラウハン</sup>「三板」<sup>サンパン</sup>「三金」<sup>サンキン</sup>「金鑼」<sup>キンラ</sup>「四線」<sup>シセン</sup>「胡琴」<sup>コ</sup>「琵琶」<sup>ヒ</sup>「三絃」<sup>サンゼン</sup>「月琴」<sup>ツキゼン</sup>「提箏」<sup>テイソウ</sup>などの楽器の図が描かれている。彩色はない。

琉球楽器は主に琉球王朝の宮廷音楽として用いられて発展した。琉球王朝の宮廷音楽は一六世紀頃から明朝乃至、清朝の冊封使を歓待するためのものとして成立。徳川将軍に対する謝恩使・慶賀使の派遣の際にも楽人が同行し、将軍の御前で楽が披露されたといわれている。室内楽を「御座楽」、屋外での演奏を「路次楽」といい、前者は大陸の影響を受けた雅楽で、後者は鼓吹楽であった。現在、徳川美術館には琉球楽器のセットが伝来しているが、これらは寛政八年に琉球使節が日本を訪れた際に携えてきたものと推定されており、寛政十年に尾張徳川家の戸山屋敷で島津家の家臣が演奏した記録がある。

「琉球楽器図」のあとには「学校建立之大意」(五六オ〜五五ウ)が掲載され、大陸の学校制度や琉球の学校制度についてまとめられている。学問所や孔子廟などの図解が六図載る。「琉客談記」(五六オ〜七〇オ)は序・跋と共に載る。序・跋ともに末尾の年記は「寛政丁巳春正月」である。

なお、本書の旧蔵者は不明。「明治十三年購求」の朱印が押されていることからみて、同年に政府が購入したと思われるが、その後、どの機関に収蔵されていたかなどの詳細も不明である。

【書誌】

外題・「位階表」／明珍家系図 各省全紀 大清風俗記 学校図説／□(欠字) 井田考□(欠字) 左肩詩集刷題簽に墨書と朱書、一部剥がれあり。(一七・八糶×三・三糶)

内題・「位階表」(一オ)「明珍家系図」(六オ)「井田考工解」(二四オ)「明朝直省郡邑」(二四オ)「大清風俗記」(三九オ)「琉球楽器図」(四七オ)「学校建立之大意」(五一オ)「琉客談記」(五七オ)

表紙・改装香色表紙（二八・〇糎×一九・〇糎）

墨付丁数・七〇丁

挿絵枚数・二八図

匡郭・なし

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

【写年・書写者】

本書の成立年代は不明であるが、集められた資料から見て、江戸時代後期から幕末頃に合冊されたものと想像される。

本書は合冊されているが同一の料紙が用いられており、もともと合わせるつもりで書写されたものと思われる。ただし、それぞれ別筆にみえ、分担して書写したものと考えられる。

【一五六】撫箏雅譜集 嘉永五年刊 三冊

昌平坂学問所旧蔵 「一九九・〇二二八」

本書は箏曲の詞章をまとめた歌本である。題簽角書には「琴曲洋峨」とある。校訂は安村検校。各流派によって伝わる詞章が異なるため、それぞれの流派で何度も改版されており、数種類の版が現存しているが、本書はそのうちで比較的新しい嘉永五年版である。三卷三冊。

安村検校は京都の人で、都名を頼一という。享保一七年に検校にのぼり、のち総検校となった。八橋検校以来の筑紫琴の名手といわれ、李白の詩を和訳した歌詞を持つ「飛燕の曲」の作曲者としても知られる。その門下には多くの門人が育ち、彼らから名古屋系・大坂系・山田流それぞれの流派が生まれた。安永八年に七四歳で没した。

本書はその安村検校の唯一の著作である。成立は宝暦五年。

横型の紙面に、毎半葉七行で余裕を持った表記がされるのが歌本の特徴。行間に注記が入る。

挿絵は一冊目の冒頭に六図。箏やその周縁のものが図示されている。絵師は不明。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙に墨印で「番外書冊」、また「小技曲芸」の紙片の添付がみられる。内閣文庫の蔵書表が貼られていて見えにくくなっているが、「新刊納本」の墨印もある。このことから、嘉永五年に出版された段階で昌平坂学問所に納められたと考えられる。

【書誌】

外題・「琴曲／洋峨／校正撫箏雅譜集 上（下）」

内題・「撫箏雅譜集」

表紙・原裝紺色唐花艶出表紙に金切箔（二二・五糎×一八・五糎）

墨付丁数・①二二丁、②二二丁、③一九丁

挿絵枚数・①七図

匡郭・四周双辺（一〇・二糎×一四・二糎）

印記・「番外書冊」（表紙に墨印）、「小技曲芸」（表紙に添付）、「新刊納本」

（表紙に墨印）、「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・見返しに序文。（一ウとみなす）

【刊年・刊行者】

本書末尾③一九才に記載の刊記は以下の通り。

「嘉永五壬子年正月／高木善次郎校正蔵版」

【一五七】大清楽譜 明治一四年刊 二帖

太政官記録局旧蔵 「請求番号一九九・〇二四一」

本書は山下松琴が明治一三年に上梓した清楽を集めた楽譜である。折本。乾坤巻二帖。

清楽は、もとは清代の商人たちに愛された軽音楽で、長崎の丸山遊女たちが好んだのをきっかけに、上方を中心にして全国に流布し、独自の発展を遂げたものである。主に月琴を伴って演奏されたようだが、基本的に制約はなく、身分を問わず好まれたため、爆発的に広がったようである。明治期においてはハーモニカやアコーディオンの楽譜にも清楽は取り入れられており、軍楽隊のレパートリーとしても必ず演奏され、日清戦争のころまでは一般的な大衆音楽のひとつであったといえる。

著者の山下松琴は、福岡の出身で、師の名を次いで津久之一座頭となった人物である。胡弓や、明清楽も習得しており、その才が本書の出版につながった。のち富士講系の扶桑教の中に音楽組織として仁康教会を設立することを提案、検校や勾当の職格を発行している。

本書は清楽の主だった楽曲を網羅した折本で、実用的な楽譜である。有界。見開き八行。

乾巻の冒頭部分に口絵として、清楽に用いられる楽器「月琴」「雲琴」「提琴」「蛇皮」「琵琶」「胡琴」「大胡琴」「笛」「阮咸」の計九図が掲載されている。これらに関しては「前記載之図面ハ皆拾分二ノ割合ヲ以テ示ス 明治十三年十二月 製図人 大日本東京府土族 国領釜四郎」と末尾に記されている。正確に計測した上で製図された細密な図版であるといえる。

なお、本書は太政官記録局の旧蔵。

【書誌】

外題・「大清楽譜 乾(坤)」中央刷題簽(一三・〇糶×三・五糶)  
内題・「大清楽譜」

表紙・原装紺色布目型押表紙(一八・〇糶×七・五糶)

見返し・黄色料紙「水和堂松琴補選／川流斎松堂校正／大清楽譜／東京川流斎梓」

挿絵枚数・①七図

印記・「太政官記録局」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本書の坤巻末尾に記載の刊記は以下の通りである。

「明治十三年十月廿五日御届／同十四年二月刻成発兌／補選者 東京府民山下国義 京橋区八官町茅拾五号地／出版人 同 小林亦七 同区五郎兵衛町二十一号地」

これによれば本書は明治十四年の刊行。小林亦七は明治期から戦前にかけて活動した印刷所で、地図や軍関係の資料を多く手掛けている。

【一五八】「楽器衣冠図」 写年不明 一冊

木村兼薛堂旧蔵 「請求番号一九九・〇一五四」

本書は雅楽に関する、楽器、衣装などの図版資料である。手彩色。一冊。

本書には奥書が存在せず、写年・書写者ともに不明である。当文庫所蔵の孤本。前半には雅楽で用いられる主な楽器「和琴」「琵琶」「箏」「笙」「笛」「高麗」「箏」「神楽笛」などの図版が載る。部分ごとに名称が注記され、各個拡大された図も併載。飾り紐などの付属品の拡大図も載せている。採寸も書き込まれている。またその名称に関しては、『和名抄』『拾芥抄』な

どの古典籍を引用し、簡単ではあるが用例も載せている。ただし、文章そのものは多くなく、本書のほとんどは図版である。後半は雅楽で用いる衣装。「冠」「玉佩」「綬」「裳」など。これらに関しては一部に彩色が施されている。

なお、本書は木村兼藤堂の旧蔵書で、文化元年に昌平坂学問所に納められたものの一つであると考えられる。

木村兼藤堂（通称は坪井屋吉右衛門）は、大坂の北堀江の造酒屋であったが、様々な学問に精通した博覧強記の人で、古今東西の希書を所蔵する蔵書家として知られていた。没後にその蔵書が幕府の命令によって献納され、文化元年に昌平坂学問所の所蔵となつている。本書の表紙右肩にも昌平坂学問所の墨印「番外書冊」が見られ、このときのものと考えて差し支えないだろう。有職故実・音楽の資料として納められたとみられる。

#### 【書誌】

外題・〔楽器衣冠図〕 左肩墨書打付

内題・なし

表紙・原装砥粉色斜刷毛目布目型押表紙（二七・〇糎×一九・八糎）

墨付丁数・二一丁（すべて図版）

匡郭・なし

印記・「番外書冊」（表紙、墨印）「兼藤堂蔵書記」「内閣文庫」「新田源氏？」

#### 【写年・書写者】

本書は奥書を持たないため未詳。

（研究員）